今宿遺跡

―今宿遺跡第１・３次発掘調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第389集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

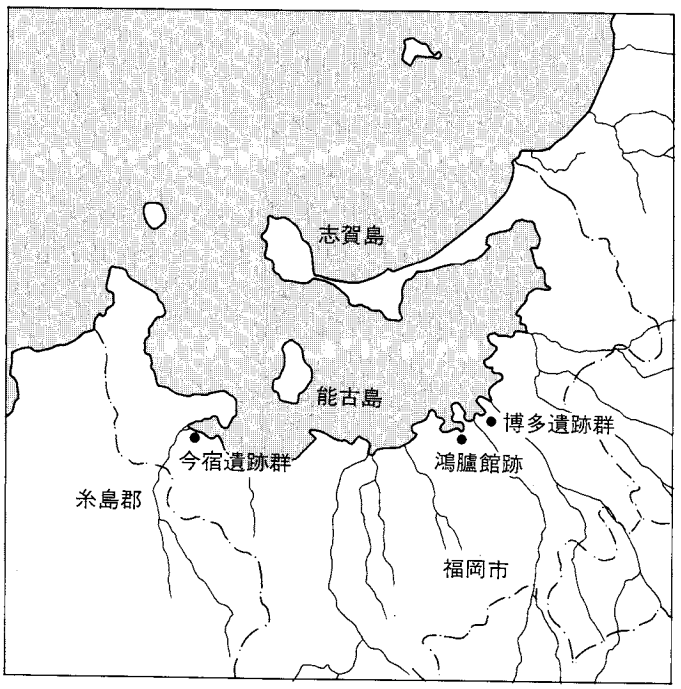
1994

福岡市教育委員会

今宿遺跡

—今宿遺跡第１・３次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第389集



平成６年３月

福岡市教育委員会

序　文

福岡市の西部に位置する西区今宿・今津地域には，弥生時代の石斧製作跡として有名な国指定史跡の今山遺跡の他，今津長浜貝塚や細形銅剣を出土した今宿遺跡などが存在しています。又，中世の今津は日宋貿易によって栄えた港湾都市であったことが知られており，古くからこの地域が，拠点的な集落を形成していたものと思われます。

本書は，福岡市水道局が今宿地域において実施した水道管の埋設事業に伴い，昭和47年と平成５年度の２回にわたって工事立会の調査を行った際に出土した遺物や遺跡の包蔵状況について報告するものです。

今宿・今山遺跡は玄武岩製の磨製太型蛤刃石斧を製作した遺跡として全国的に著名ですが，今回の調査では，これらに関する遺物の発見と共に今宿地域における弥生時代から平安時代までの歴史的な変遷を知り得る重要な手懸かりを得ることができました。

本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり，また研究資料としてご使用いただければ幸いに存じます。

平成６年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　　尾花　剛

例　言

1．本書は福岡市西区今宿地域における福岡市水道局が実施した水道管埋設工事に伴い，福岡市教育委員会が昭和44年５月11日～23日及び，平成５年６月４日に工事立会を行い，調査を実施した今宿遺跡第１次調査及び第３次調査の報告である。

2．工事立会の調査は，昭和44年度を塩屋勝利が，平成５年度は井澤洋一，長家伸が担当した。

3．本書に掲載した遺物の実測は吉田扶希子，廣嵜香，田中昭子，松尾正直，奥村俊之，児玉健一郎，辻哲也，入江誠剛，小山田政光，吉田富美子，古荘千栄子，鳥越のり子が行った。尚，石器・土器の一部は機械実測を行い，廣嵜香が担当した。

4．遺物実測図の製図は井澤，吉田（扶），廣嵜香が行った。

5．遺物の写真撮影は，藤川繁昌，井澤が担当した。

6．本書の作成にあたっては福田小菊，多田映子，西口キミ子，池田孝弘，吉永祐美子，三浦明子，黒瀬志保の協力を得た。尚，表紙の題字は廣嵜による。

7．本書の遺物番号は調査年次毎に通し番号で示し，挿図と図版番号を一致させている。

8．本書にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は，福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

9．本書の執筆は主に吉田（扶）が行い，この内，第１章１，第４章１を塩屋が，第１章２，第２章３，第３章を井澤が分担した。

10．編集は吉田（扶）との協議により井澤が行った。

調査番号	６９０６			遺跡略号	IMJ－１
地番	福岡市 西区 今宿 １丁目他			分布地図番号	今宿112
開発面積	560m²	調査対象面積	560m²	調査面積	452m²
調査期間	1969年（昭和44年）５月11日～23日				

調査番号	９３３６			遺跡略号	IMJ－３
地番	福岡市 西区 今宿			分布地図番号	横浜111
開発面積	923m²	調査対象面積	923m²	調査面積	185m²
調査期間	1993年（平成５年）６月４日				

本文目次

第１章　はじめに……1
　１．第１次調査に至る経緯……1
　２．第３次調査に至る経緯……2
第２章　遺跡の立地と環境……3
　１．立地……3
　２．歴史的環境……3
　３．今宿・今山遺跡の調査……6
第３章　第３次調査の記録……11
　１．調査地点の立地と概要……11
　２．遺構・遺物説明……11
　３．まとめ……12
第４章　第１次調査の記録……13
　１．調査地点の立地と概要……13
　２．遺物説明……16
付編　今宿・今山遺跡及び周辺遺跡の表採資料……51

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）……4
Fig. 2　今宿・今山遺跡調査位置図（縮尺1/12,000）……7
Fig. 3　今宿周辺の試掘調査位置図（縮尺1/5,000）……9
Fig. 4　試掘トレンチ土層模式図……9
Fig. 5　第３次調査地点位置図（縮尺1/5,000）……10
Fig. 6　土層模式図……10
Fig. 7　甕棺実測図（縮尺1/8）……12
Fig. 8　第１次調査地点位置図（縮尺1/4,000）……15
Fig. 9　第１～４地点出土遺物実測図（縮尺1/4）……17
Fig.10　第４地点出土遺物実測図（縮尺1/4）……19
Fig.11　第５・６地点出土遺物実測図（縮尺1/4）……20
Fig.12　第７地点出土遺物実測図①（縮尺1/4）……21
Fig.13　第７地点出土遺物実測図②（縮尺1/4）……23

Fig.14　第８地点出土遺物実測図①（縮尺1/4）……24
Fig.15　第８地点出土遺物実測図②（縮尺1/3）……25
Fig.16　第９・10地点出土遺物実測図（縮尺1/4）……26
Fig.17　第11地点出土遺物実測図（縮尺1/4）……27
Fig.18　第12地点出土遺物・表採遺物実測図（縮尺1/4・1/3）……28
Fig.19　表採遺物実測図①（縮尺1/4）……30
Fig.20　表採遺物実測図②（縮尺1/3）……31
Fig.21　表採遺物実測図③（縮尺1/3）……32
Fig.22　表採遺物実測図④（縮尺1/3）……35
Fig.23　甕棺実測図①（縮尺1/8）……37
Fig.24　甕棺実測図②（縮尺1/8）……38
Fig.25　土錘実測図（縮尺1/3）……41
Fig.26　土錘・土製品・石製品実測図（縮尺1/3・1/2）……42
Fig.27　石製品実測図①（縮尺1/3）……48
Fig.28　石製品実測図②（縮尺1/3）……49
Fig.29　今宿・今山遺跡表採遺物出土位置図（縮尺1/6,000）……52
Fig.30　今宿周辺遺跡表採遺物出土位置図（縮尺1/50,000）……54
Fig.31　今宿周辺表採遺物実測図①（縮尺1/3・1/4）……55
Fig.32　今宿周辺表採遺物実測図②（縮尺1/2・1/3・1/4・1/6）……56

表目次

Tab. 1　今宿・今山遺跡調査一覧表……8
Tab. 2　今宿遺跡第１次調査地点一覧表……14
Tab. 3　今宿遺跡第１次調査出土土錘一覧表……44
Tab. 4　今宿遺跡第１次調査出土石製品一覧表……44

第１章　はじめに

１．第１次調査に至る経緯

(1)　調査経過

1969年５月，福岡市水道局は今宿町（現在の西区今宿駅前１丁目・今宿町地内）の東松原から西原へと続く旧唐津街道において，水道管埋設工事に着手した。

福岡市教育委員会は，前年の1968年度から国・県の補助を受け，３ケ年の継続事業で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施しているところであり，初年度の成果として1969年３月に，『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第１集－福岡西部地域（早良平野以西）の遺跡分布調査の概要－』を刊行したばかりであった。水道管埋設工事地内は，この地名表に記載された西松原遺跡，地蔵尊遺跡を含み，いわば周知の遺跡を貫通するものであった。しかしながら当時の文化財保護の体制は，1968年６月15日付けの文化庁発足を受け，４月に福岡市にも教育委員会に文化課が発足したばかりで，民間事業や公共事業を問わず，各種開発に対する埋蔵文化財の事前チェックの方法はまったく不備なものであり，この水道管埋設工事に付いても，水道局側との事前の協議は行われていなかったのである。

このため，工事は埋蔵文化財の存在に関わりなく進行していたのであるが，当時，分布調査のために調査員を委嘱していた深江嘉和氏が５月10日に工事現場を訪れ，多量の異物が出土していることを発見され，直ちに文化課に通報されたのである。文化課では翌５月11日に文化財専門職員を派遣して現地の状況を確認するとともに，今後の調査について水道局側と協議した。

その結果，これまでの経過と水道管埋設工事という性格から，調査は工事に先行する事前発掘調査ではなく，工事と平行する形での立会調査となった。また調査費や資料整理費については，協議の埒外であった。調査は1969年５月11日から５月23日までの延べ13日間実施した。

(2)　調査の組織

調　査　委　託　　福岡市水道局

調　査　主　体　　福岡市教育委員会指導部文化課　文化課長　青木崇

文 化 財 係 長　　清水義彦，事務吏員　石橋博，文化財主事　三島格，文化財専門員　柳田純孝，同　折尾学

現　地　調　査　　技術吏員　下條信行，文化財専門員　塩屋勝利

調　査　協　力　　板屋猛（故人），深江嘉和（故人），中原志外顕，石井忠

調査から四半世紀を経た今，調査主体の関係者は定年退職されたり，新たな職場でご活躍されている方もおられる。分布調査にご尽力いただき，この調査の契機を作られた深江嘉和氏や，

今山遺跡の保存運動に精根を傾けられた板屋猛先生も既に故人となられている。25年ぶりに調査記録を公にすることは，誠にはばかられる思いがするが，この機会に改めてお二人のご冥福をお祈りすると共に，福岡市の埋蔵文化財行政史の一端を振り返っていただければと考えるものである。

2．第3次調査に至る経緯

(1) 調査経過

福岡市西区今宿の砂丘上に東西方向に設けられた県道志摩・前原線の周辺は今宿遺跡群が存在しており，昭和51年の自転車歩行者道設置にかかわる発掘調査において弥生時代の甕棺墓や細型銅剣を副葬した木棺墓等を発見している。平成5年度の事業として福岡市水道局が西区横浜から今宿に亘って水道管埋設工事を行ったが，この事業については例年，埋蔵文化財課が開発事業関連各課に対して依頼している事業照会に対して回答されておらず，夜間工事中に甕棺墓が地元住民によって発見され，通報を受ける事態となった。福岡市教育委員会では早速，水道局に対して工事内容の説明を求めると共に，市民の通報にもとづき，掘り出された甕棺の確認を行い，且つ平成5年6月4日には水道管埋設工事に伴う立会調査を行った。その結果，新たに遺構・遺物を確認することができなかったので，水道局施設課と協議の上，工事の継続作業を了承し，発見した甕棺については文化庁に報告書を提出する旨で合意したため，両者において受託契約を締結した。

発見された甕棺墓の出土地点は，福岡市役所今宿出張所の前に位置し，昭和51年の第2次調査において検出した甕棺墓群の一部に相当する。

(2) 調査の組織

調査委託者	福岡市水道局
調査主体者	福岡市教育委員会
立会調査	文化財部埋蔵文化財課
担当	井澤洋一
	長家伸
調査協力者	大内士郎（玄洋公民館主事）
整理作業	吉田扶希子，廣嵜香（調査員）
	田中昭子，吉永祐美子

第２章　遺跡の立地と環境

１．立地

当該遺跡は，福岡市西部今津湾に面する今宿砂丘上に立地し，長垂山と今山に囲まれた地域である。背振山から派生する長垂山の山塊は含紅雲母ペグマタイト岩で形成されているが，早良平野と糸島平野をへだてる山稜でもある。古代から長垂越えは両平野を結ぶだけでなく，東西への交通の要となっており，名護屋城へ通じる太閤道もこの峠を経由している。また，今山は，周知の通り小斑晶を含む良質の橄欖石玄武岩で覆われており，そのため太型蛤刃石斧の生産地・製造跡として知られ，今山遺跡の北の，呑山遺跡も類似した性格を持っている。今宿砂丘は長垂山から今山を結ぶ形で，国道202号線沿いに東西に延びており，砂丘の中央部は約60mの幅をもっている。砂丘の後背地にはラグーンが形成されている。弥生時代中期において，海水面は約２mに低下している。かってはこの砂丘上に元寇防塁が築かれており，一部は国指定史跡になっている。

今宿砂丘の後背にある今宿平野は，長垂山・叶岳・高祖山に囲まれ，内海に面した狭い平野である。高祖山から丘陵地帯が舌状に延び，谷部がヤツデ状に広がり入り込んでいる。この平野は，『魏志倭人伝』において「伊都国」と称される前原平野と隣接している。今津湾沿いと同様に今宿平野においても，各時代に亘って遺跡が発見されている地域である。

２．歴史的環境

当該遺跡をとり囲む今宿周辺の歴史を概観すると，今山遺跡・今宿五郎江遺跡・青木遺跡・今宿大塚古墳・山ノ鼻１・２号古墳，丸隈山古墳，そして今津長浜貝塚等など歴史的に著名な遺跡が，各時代に亘って点在する。

弥生時代前期になると今山遺跡・呑山遺跡では玄武岩製石斧の製造が始まる。又，今山遺跡とはわずか２kmと近距離にある青木遺跡でも，非常に多量の玄武岩製石斧が出土している。弥生時代中期前葉からの所産と考えられ，石斧の大きさが今山とは規格的に該当しないため，調査担当者は，異なる生産形態を営んでいたと考えている。同時期の今宿五郎江遺跡においても同様に玄武岩製石斧が出土しており，また，この遺跡では多種多様な石錘も出土している。当時の社会生活様式としては平野部の狭いこの地域では漁撈と共に，今山遺跡等における玄武岩製石斧と，毘沙門山産の滑石製品の生産等によって交易を中心とした経済活動を行なったものと考えられる。

古墳時代になると高祖山麓に沿った丘陵斜北面には，前方後円墳が12基築造されている。鋤先古墳・今宿大塚古墳・丸隈山古墳・若八幡古墳・山ノ鼻１・２号古墳などである。いづれも規模が大きく，副葬品が豊富な事から今宿平野の首長クラスの古墳と考えられ，且つ，築造の時期を追えることから首長層の形成過程を知り得る重要な手懸かりとなっている。また，古墳時代後期になると，13～15群に別れて分布する300基以上の群集墳が存在しており，これらは盟主層の墓と考えら

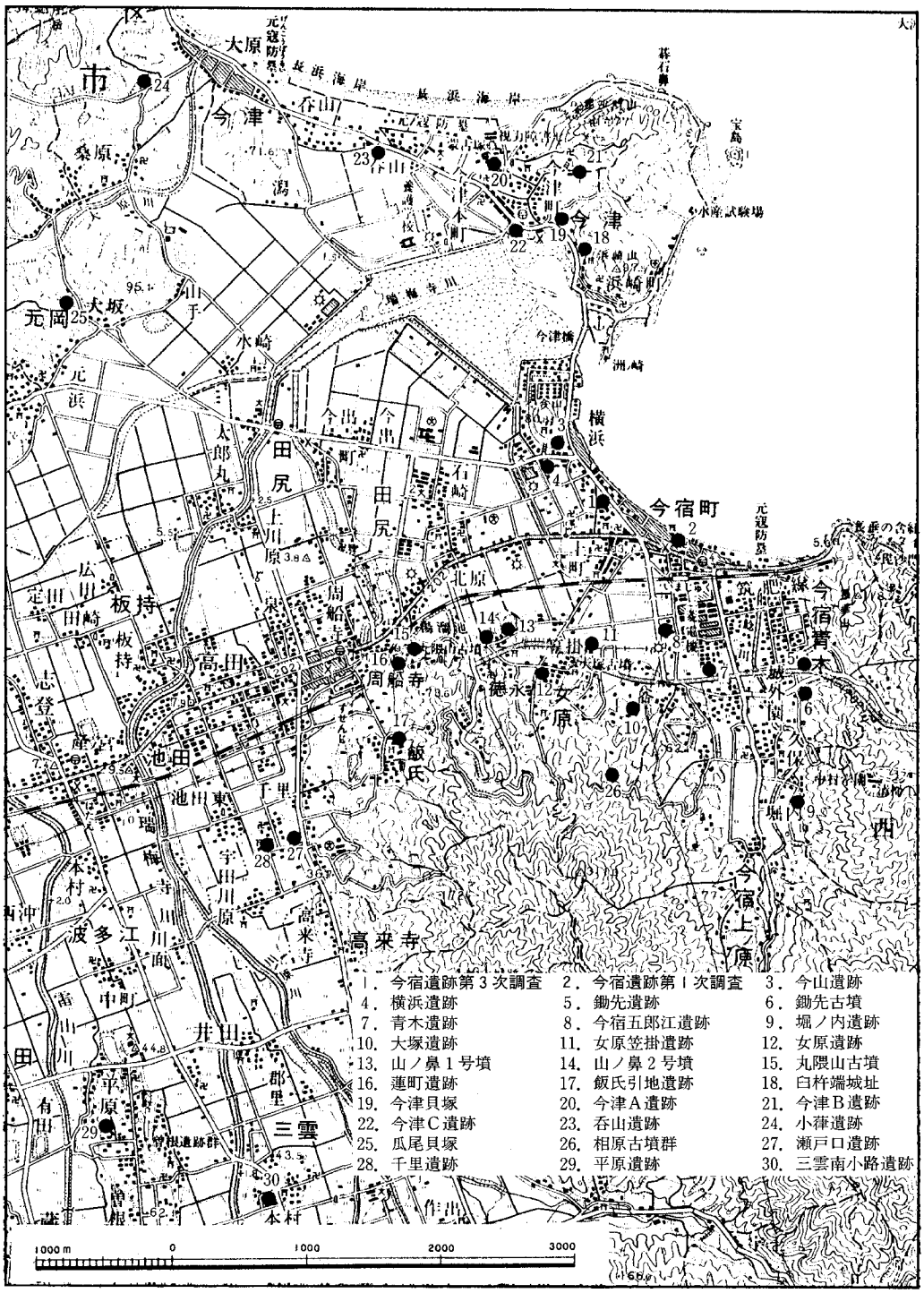


Fig 1　周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000）

この写真は今宿在住の故深江嘉和氏が今宿周辺の自然景観・風俗・祭礼行事等に関して撮影されていた内の一部を拝借したものである。

舗装前の志摩・前原線を東西方向から撮影
右手は今宿の松原で，砂丘の陰により海は見えない
昭和35年頃撮影

志摩・前原線から北側の砂丘上の墓標群を撮影
砂丘の状況や高さが推測出来る。
遠くに今山がみえている。
昭和35年頃撮影

今宿市営住宅建設に伴う造成工事により砂丘が削平を受ける。
背景は砂丘後背地の水田である。
又，遠景に可也山が望める。砂丘の断面の状態と集められた大石群元寇防塁に使われていた石であると，撮影者は語っていた由。
昭和35年頃撮影

れることから今津平野における社会構造が特異性をもっていることを示唆している。

3．今宿・今山遺跡の調査

(1) 今山遺跡

中山平次郎博士は大正12年に今山中腹の熊野神社の周辺において，多数の玄武岩製石斧未成品を発見され，考古学雑誌に弥生時代の石斧製作所としての位置づけと石斧製作工程について報告されたことから著名となった。その後の研究によって石斧の製作が弥生時代前期後半に始まることや，その供給先が福岡県南部・佐賀県・熊本県北部にまで及ぶことが知られるようになった。今山遺跡の発掘調査は，昭和43～59年迄の期間に6回に亘って行われ，熊野神社周辺の他，東南部山麓・西側斜面及び山麓を含む地域に石斧製作の工房の存在が判明している。

尚，第3次調査の第42・43地点では海岸部より，古墳時代前期の製塩土器が多数出土しており，博多湾岸では早くから製塩が行われていたことを示している。

(2) 今宿遺跡（今宿遺跡第2次調査）

昭和35年の市営住宅建設に際して，大量の土器・石器の他，弥生時代～古墳時代初頭の甕棺墓の他，蛸壺・製塩土器が発見されている。

1976年7月，本市教育委員会は今宿サイクリング道路建設に伴って発掘調査を行い，13・14地点から弥生時代前期～後期の木棺墓，甕棺墓を発見した。土壙墓からは硬玉製勾玉，細型銅剣1本が出土。甕棺墓は中期後半から後期初頭の小児棺が出土している。

(3) 今宿西松原遺跡（今宿遺跡第1次調査）

昭和44（1969）年に水道管埋設工事に伴う立会調査で，今宿駅前1丁目から今宿町1151番地の間で遺物を採集した。弥生時代前期の甕棺墓，及び弥生時代～古墳時代の遺物が多量に出土した。その内，管状土錘が多量に出土したことは，漁民集落の存在が考えられる。詳しくはP13参照されたい。

(4) 福岡市営住宅建替事業に伴う試掘調査

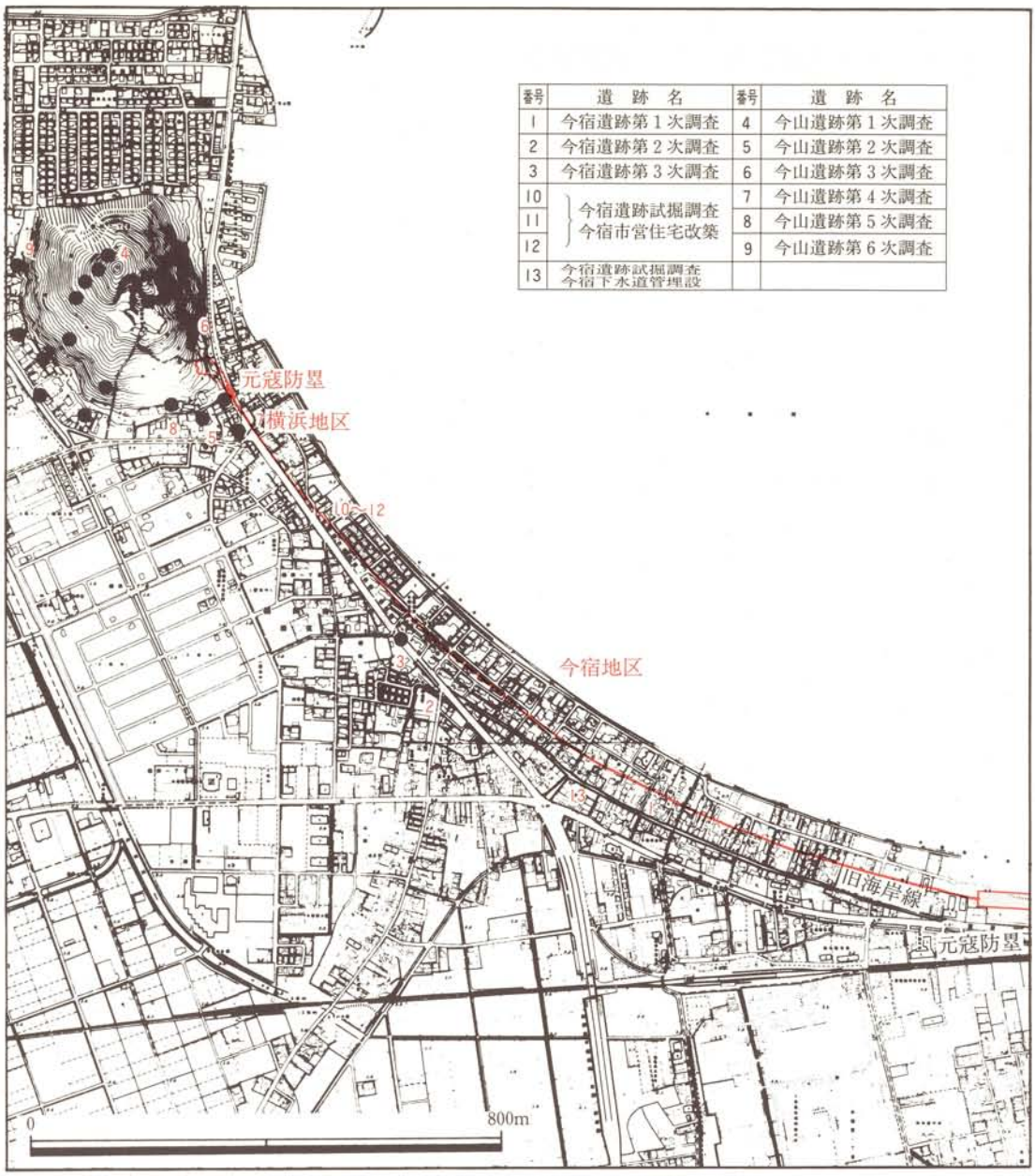
市営今宿団地は昭和35年に建築されており，老朽化のため平成5年度に高層住宅として建替の計画であった。試掘調査は既存建物の解体後の平成4年度に3回(延べ4回)に亘って実施した。

市営住宅建設当時，県道志摩・前原線の海側は高さ約2m程度の丘陵によっており，今宿・横浜地区住民の集団墓地が形成されていた。

地元の大内士郎氏によれば造成工事中には，箱式石棺，甕棺墓等が多数発見されたとの由。

現在も当時の造成工事によって出土した甕棺や石器などが大内士郎氏によって保存されている。

試掘調査のトレンチは9ケ所設定したが，いずれも今宿団地造成の際に削平を受けており，弥生時代の土壙やピットが部分的にあったが，近世の甕棺に転用された弥生時代甕片の他は散発的であった。地表面付近においては近世の自然石を用いた墓石がみられ，深さ1.8～2mにお



番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	今宿遺跡第1次調査	4	今山遺跡第1次調査
2	今宿遺跡第2次調査	5	今山遺跡第2次調査
3	今宿遺跡第3次調査	6	今山遺跡第3次調査
10	今宿遺跡試掘調査 今宿市営住宅改築	7	今山遺跡第4次調査
11		8	今山遺跡第5次調査
12		9	今山遺跡第6次調査
13	今宿遺跡試掘調査 今宿下水道管埋設		

Fig. 2　今宿・今山遺跡調査位置図（縮尺1/12,000）

いては木桶を用いた棺が無数に存在することが判明したが，発掘調査の対象とはしなかった。

又，元寇防塁については地表面近くで，20～60cm大の玄武岩礫の集石が存在したが，石垣としての構造をもっておらず，且つ，昭和30年代の写真によれば，現地表より高い位置に石垣が認められるところから，元寇防塁は既に削滅したものと考えたい。

(5) 今宿下水道工事に伴う試掘調査

福岡市下水道局は西区今宿の旧道において，今宿バスセンター付近から志摩・前原線の取付きまでの約0.5kmの間に下水管埋設工事を実施することになり，福岡市教育委員会では平成4年3月17日～8月28日の間，工事立会を行った。調査個所はFig. 3に示しているが，No. 1～No. 4地点の間は砂丘が削平を受けており，No. 5・6・8地点は既設の水道管埋設工事で破壊を受けている。この地点での水道工事中に出土した遺物は今回の第1次調査として収録している分の一部である。No. 7地点は旧表土が遺存し，玄武岩製砕未成品片が出土した。No. 9地点は立会調査ができなかったため，施工業者からの聞き取りによるが，石垣が発見され，石垣の下に胴木が存在したとのことであった。No.10地点は，深さ1mの地点に灰青色砂，又は灰青色粘質土層が存在していたので，砂丘後背湿地と考えられる。

Tab. 1　今宿・今山遺跡調査一覧表

No.	調査番号	遺　跡　名	事　業　名	地点	所　在　地	調査期間	備考
1	6906	今宿遺跡第1次調査	水道管埋設工事		福岡市西区今宿西松原	690501～0504	
2	7601	第2次調査	自転車・歩行車道路建設	13・14	〃	760700～08	註2
3	9336	第3次調査	水道管埋設工事		〃	930604	
4	6820	今山遺跡第1次調査	範囲確認調査		〃	681206～08	註1
5	7301	第2次調査	範囲確認調査		福岡市西区横浜1603-13	740303	
6	7602	第3次調査	自転車・歩行車道路建設	42・43	横浜2丁目	760800	註2
7	7722	第4次調査	専用住宅建設調査		〃	770726～29	
8	7952	第5次調査	学術調査		〃	790429～0505	註3
9	8409	第6次調査	重要確認調査	10ヶ所	〃	841008～1130	
10	4-1-527	今宿試掘調査	今宿市営住宅	4ケ所	福岡市西区今宿	920506	
11	4-1-527	〃　〃	〃	3ケ所	〃	920722・23	
12	4-1-527	〃　〃	〃	2ケ所	〃	921028	
13	3-1-308	〃　立会調査	下水道管埋設工事	10ケ所	〃	920317～0828	

註1　「今山遺跡(I)」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集　福岡市教育委員会　1966

註2　「今山・今宿遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集　福岡市教育委員会　1981

註3　「今山遺跡第5・6地点発掘調査を終えて」　浜田昌治　1980

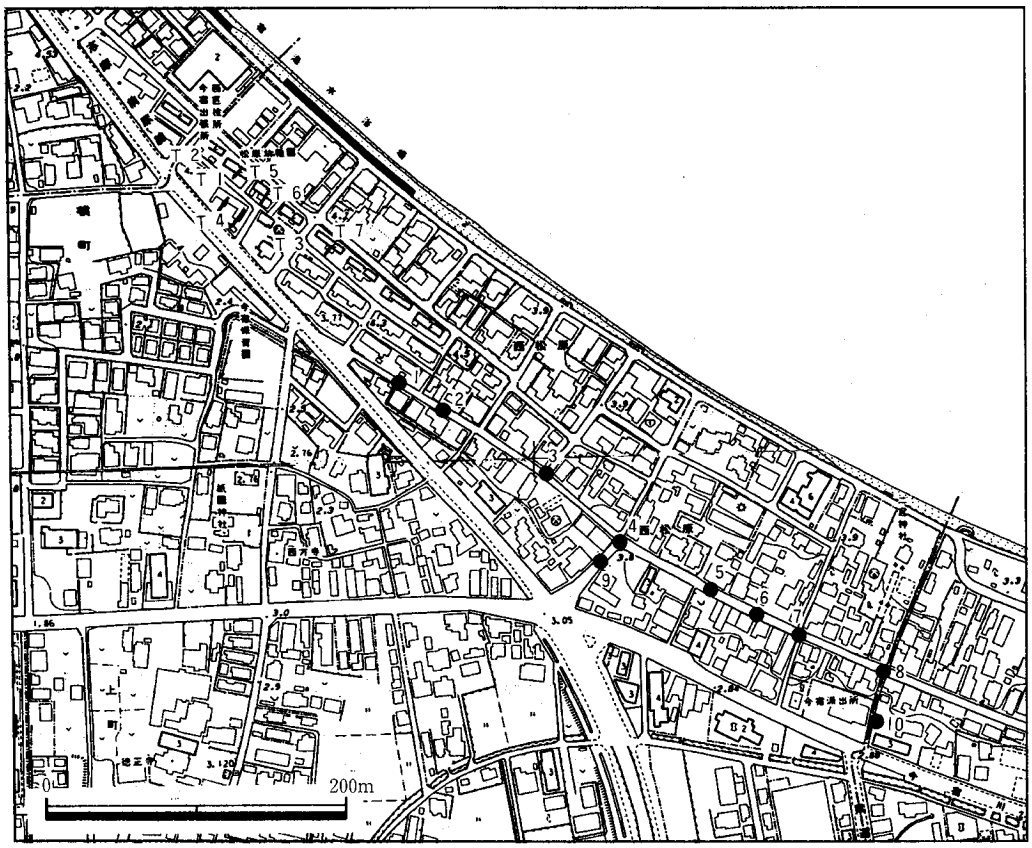


Fig. 3　今宿周辺の試掘調査位置図（縮尺1/5,000）

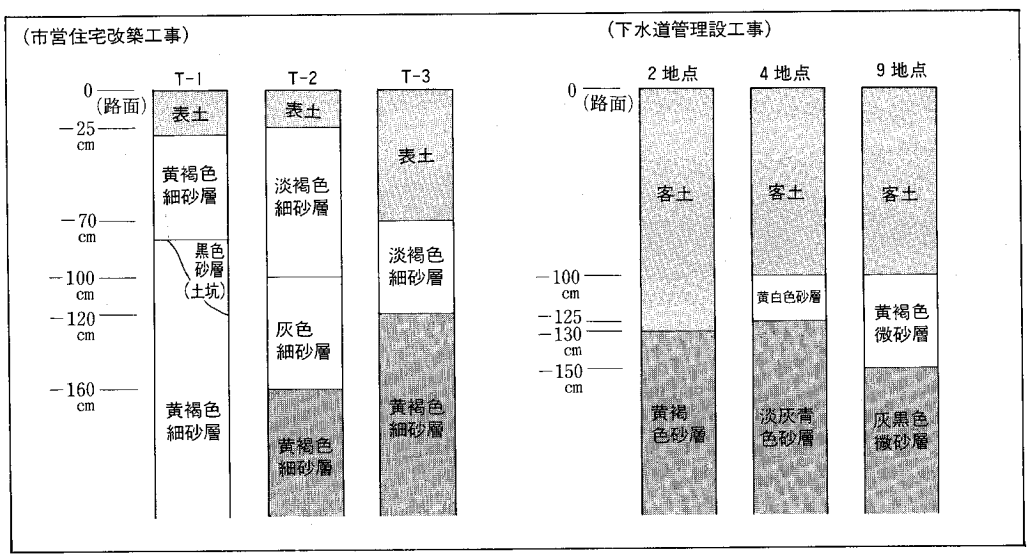


Fig. 4　試掘トレンチ土層模式図

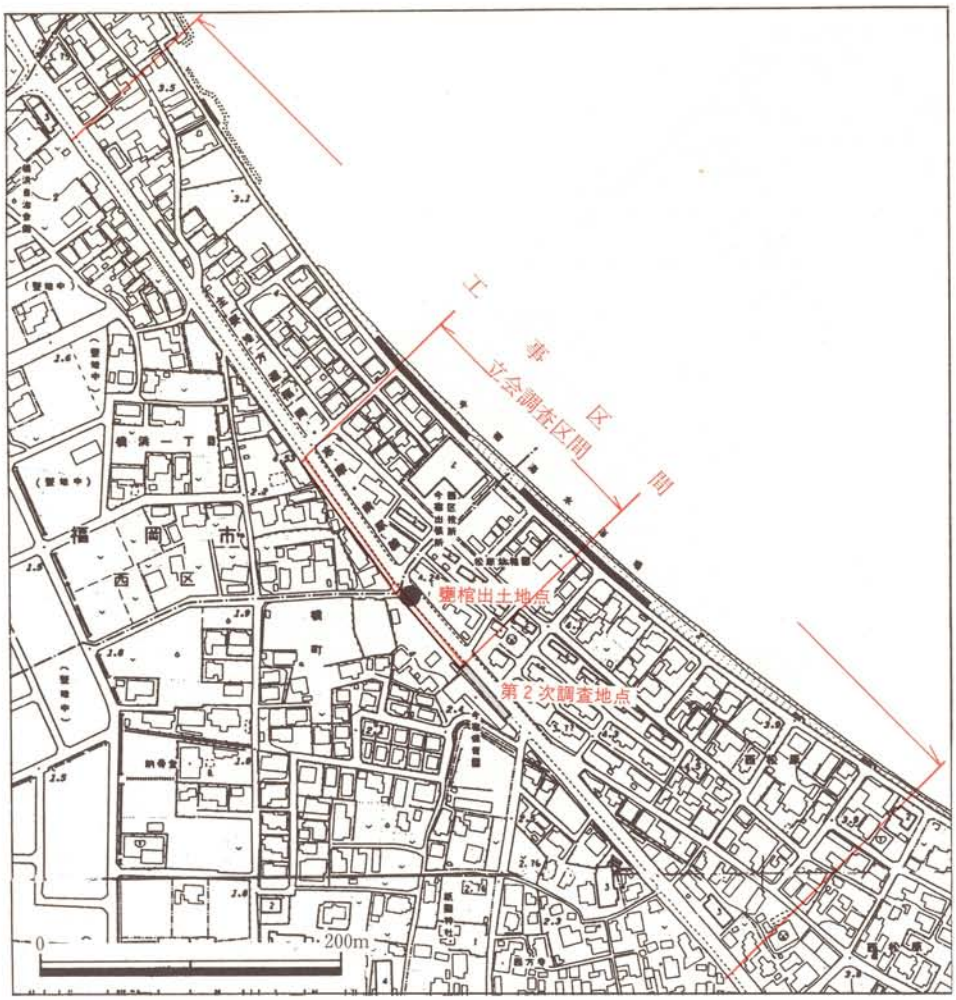


Fig. 5　第3次調査地点位置図（縮尺1/5,000）

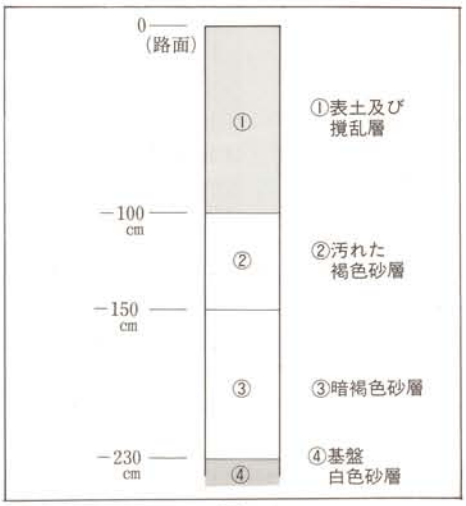


Fig. 6　土層模式図

第3次調査出土甕棺墓下甕

第３章　第３次調査の記録

１．調査地点の立地と概要

(1)　立地

長垂山から派生した砂州は独立した島であった今山を結び，最大幅200m，長さ1.5kmの砂丘を形成しているが，当該地はこの中間地点に相当する。砂丘後背地はかつては入江であり，昭和35年に市営住宅が建設されるまでは，砂丘は高く，現在の志摩・前原線の道路上からは海岸を見渡すことは不可能だったといわれる。

市営住宅の造成工事によって元寇防塁が破壊を受けていることは言うまでもないが，その他，付編で述べるように弥生時代から古墳時代の土器や石器が多数出土しており，箱式石棺墓もあったと言われる。又，甕棺から出土した鹿骨装刀子は注目できる資料である。

昭和51年の本市教育委員会の第２次調査では弥生時代中～後期の甕棺墓の他，青銅器を副葬した木棺墓を発見しており，今山遺跡と関連をもった弥生時代の集落或いは墓地として重要な位置を占めている。

(2)　概要

この地点の土層はFig. 6に示すように，深さ230mまでは汚れた褐色砂に覆われており，基盤の白色砂はその下に存在する。暗褐色砂層からは土器片は出土していない。

尚，当該甕棺墓の発見地点である今宿保育園前から北東方向（今津方向）に約170m区間について工事立会を行ったが，他に遺物は確認できなかった。当該甕棺墓の出土地点から考えて，第２次調査の12・13地点で出土した弥生時代中～後期の甕棺墓地群の中に含まれる遺構であることを示している。

２．遺構・遺物説明

(1)　甕棺墓

工事中に甕棺墓を発見したとの市民からの通報で現地調査したが，既に工事が進頻しており，墓壙或いは出土状況は不明である。聞き取りによれば，水道工事が平成４年６月から長さ700m，幅1.3mの予定で進められており，夜間工事中にバック・ホーで甕棺が掘りあげられたとのことである。甕棺は掘削溝の地表下約100mの地点に存在し，南西側に上甕，北東側（今津湾側）に下甕が埋められ，道路と直行する形で，ほぼ水平であったとのこと。残念ながら上甕は破壊され，ほとんど残っていない。弥生時代前期後半の金海式甕棺に相当する。

(2)　遺物・甕棺（Fig. 7）

甕棺は合口式である。上甕は頸部打欠きで，器形から金海式甕棺と思われる。上甕は全体の約1/4の遺存状況で，頸部の一部のみであった。底部は欠損している。頸部の復原最大径は52.8cm，現存

高は49.6cmを測り，３本の沈線を施す。胴部にはタテ方向に６本単位のハケ調整，下半にはヘラナデ調整を施す。頸部は指頭圧痕後にナデ調整である。胎土に砂粒を含み，外面は暗茶褐色，内面は外面より黄色味を帯びる。焼成は良好である。下甕は口縁部の一部を欠損しているが遺存状態は良く，口径42cm，底径11.0cm，器高66cmを測る。底部はやや上げ底になっている。肩部に３条，頸部に２条の沈線を施している。胴部の下位に外側から施した穿孔がある。径は約2.2cmを測る。口縁部は緩やかに外反し，端部に刻目を有する。体部外面は磨滅しており，調整は不明である。口縁部付近はヨコナデ調整である。内面は粘土を巻きあげ，指でナデあげた痕跡が明瞭に残る。胎土に砂粒を多く含み，外面は暗茶黄色である。内面はより褐色を帯びる。焼成良好である。

この甕棺は，金海式甕棺の古段階のもので，時期的には弥生時代前期後半であろう。市営住宅建設に伴う造成工事で発見された甕棺墓地に含まれるものである。この地域一帯に弥生時代前期からの墓地が形成されていたと推察できる。

3．まとめ

当該調査地点は第２次調査13・14地点の甕棺墓からは約65m西側に位置している。第２次調査の甕棺墓は３基で，中期後半から後期初頭の時期が考えられ，いずれも小型棺であることは小児甕棺墓群のエリアを形成するものであろう。第３次調査の甕棺は弥生時代前期末の金海式甕棺であり，合口棺の復原の長さは1.4mを推測できる。第２次調査の甕棺より大型であり，且つ成人葬をも可能にする大きさである。

以上の点を整理すれば，甕棺墓の墓域が，一つには時期に区別があること。二つには成人墓と小児墓の墓域が区別されていたことが考えられる。

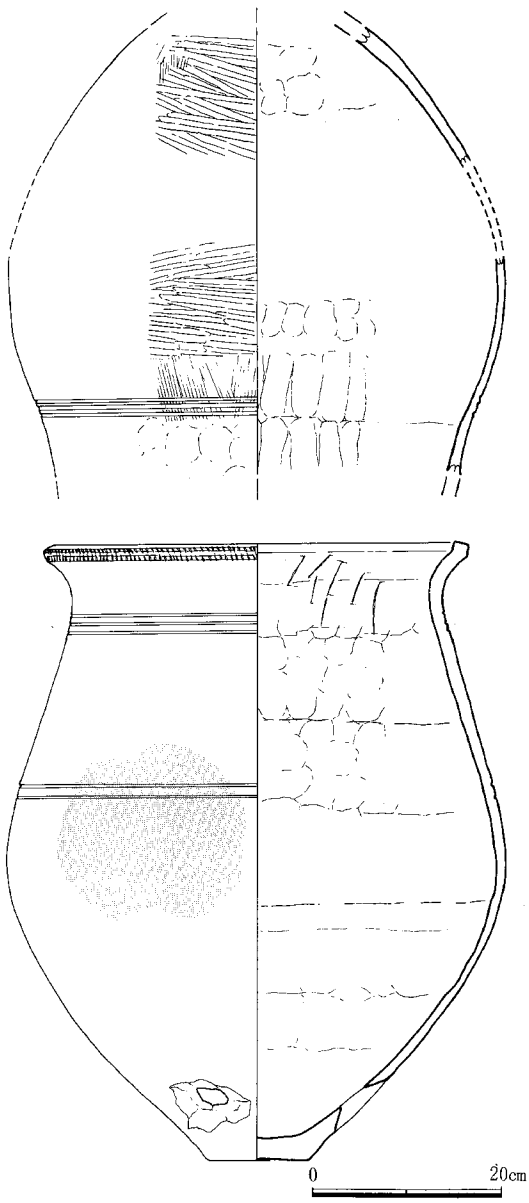


Fig. 7　甕棺実測図（縮尺１/８）

第４章　第１次調査の記録

１．調査地点の立地と概要

(1)　立地

調査地点は，福岡市西部の早良平野と今宿平野を区切る長垂山丘陵西側から延び，博多湾に面する海岸砂洲に立地する。この砂洲は，長垂山の先端基部から北西に位置する今山の麓まで，標高4.5m前後で緩やかな弧状をなして続き，最大幅200m，長さ1.5kmである。砂洲先端に位置する今山は，弥生時代前期末から中期に営まれた石斧製造の遺跡として著名であり，国の史跡に指定されている。この今山の西側には，糸島平野を形成する端梅寺川が今津湾に流入するが，古くは河口部はもっと湾入し，砂洲の後背地は入江をなしていたと考えられる。長垂山西側には背振山系から派生して北側に延びる丘陵が続いており，先端部には弥生時代，古墳時代を中心とする集落遺跡，丘陵部には前方後円墳を含む大規模な古墳群の分布が見られ，福岡市西部の濃密な遺跡地帯を形成している。

(2)　調査の概要

水道管埋設工事が行われた道路は，藩政時代には宿場が置かれた唐津街道にあたり，現在の国道202号線の北側に位置している。工事は国道と旧街道が交差する東側の地点から開始され，今津・西浦方面と交差する地点までの総延長700mが工区であった。この道路は幅員が６ｍと狭く，水道管の埋設は，道路中央部に幅0.8m，深さ1.8m，長さ約25mの単位で明かり掘削を行い，東側から西側へ順次埋設する工法であった。

５月11日の時点では水道管埋設は，開始地点から約150m西側まで既に終了していたが，この間からも遺物が出土しており，深江氏によって採集されていた。したがって，立会調査を実施したのは，その地点から西側の延長約550mの区域であるが，工事の進捗状況に合わせた断続的調査となった。また，掘削の幅が狭いため，本格的な記録作成に限界があり，遺物が集中する部分での土層や出土状況のメモ作成，写真撮影を行ない，遺物を取り上げるだけの調査であった。以下調査地点の概要を記す。

第１地点　地表下45cmまでは道路の基礎部で，そこから下は砂層となる。地表下1～1.5mに黒褐色砂層の遺物包含層があり，土師器高坏等を検出した。遺物の量は少ない。

第２地点　地表下1.3mで黒色砂層の包含層が40～50cmの厚さで堆積し，上下２層に分けられる。上層には土師器甕等の古墳時代の遺物を少量含み，下層からは，今山産の石斧未製品が検出された。調査地点西側の地蔵尊前付近では，８基分の甕棺が集中的に検出され，すべてが最

古式の伯玄式甕棺である。この型式の甕棺は，同様な砂丘遺跡である早良区藤崎遺跡からも出土しており，弥生時代甕棺墓制の成立を考える上で注目されよう。

第3地点　黒色砂層の包含層から，弥生時代後期後半のほぼ完形の器台2点が検出された。

第4地点　この地点より西側が，とくに遺物の包含状態が密になる傾向を示すが，住居跡等の遺構は把握出来なかった。包含層は上下2層が認められ，この地点では弥生時代中期前半の土器を主体とし，蓋，甕，高坏等の器種がある。

第5地点　上層からは古式土師器，管状土錘，有孔土製円盤が検出され，下層からは弥生時代中期の土器，今山産石斧未製品が出土した。

第6地点　地表下1.5mの黒色砂層に弥生時代中期前半，中期後半，終末期の土器を混存する。また，今山産石斧未製品も検出された。

第7地点　下層の黒色砂層から弥生時代中期前半の甕，壺，上層からは終末期の壺，支脚型土器，そして古式土師器が検出された。

第8地点　第7地点とほぼ同じ傾向で弥生土器，古式土師器を包含する。また，下層には今山産石斧未製品を含む。

第9地点　弥生時代中期の土器は少量となり，古式土師器が主体を占める。この時期の管状土錘がまとまって出土しており，漁撈関係集落の存在が予想される。

第10地点　弥生時代中期の土器が主体である。

第11地点　弥生時代終末期と古式土師器を含む。

第12地点　前地点と同様の傾向が窺われる。

(3)　まとめ

以上のように，延長450mの調査区には，弥生時代前期中頃の甕棺墓地を初現とし，前期末から中期初等，中期後半，後期後半から終末の時期，そして古墳時代前期から中期の時期の人々の営みがあったことが推測される。これらの全体像を明らかにするには面としての調査が必要で，立会調査の限界を示すものである。

Tab. 2　今宿遺跡第1次調査地点一覧表

地点	取上げ番号	名　　称	地点	取上げ番号	名　　称
1	23	コンクリート工場看板横	8	13	浜地宅前生垣　東側
2	6	濱時太郎宅前　黒色砂層		3	〃　　中央
3	24	亀井春江宅前　黒色砂層		17	〃　　西側
4	8	久保建材店前　上層	9	10	久保ポンプ店前
	14	〃　〃　黒色砂層	10	16	国友洋服店前
	20	〃　〃　下層	11	2	山本恒助宅前
5	19	久保商店前　正面	12	15	農協前　正面
	4	〃　倉庫前		22	〃　西側
6	18	波多江秀二郎宅前　黒色砂層	表採	1	丸喜荘前～国友辰雄宅東側
7	7	山本ガラス店前　東隅		9	国友辰雄宅　地表下1～1.5m
	5	〃　〃　正面黒色砂層-132cm		12	井上写真館前～地蔵尊
	11	〃　〃　正面		21	表採一括

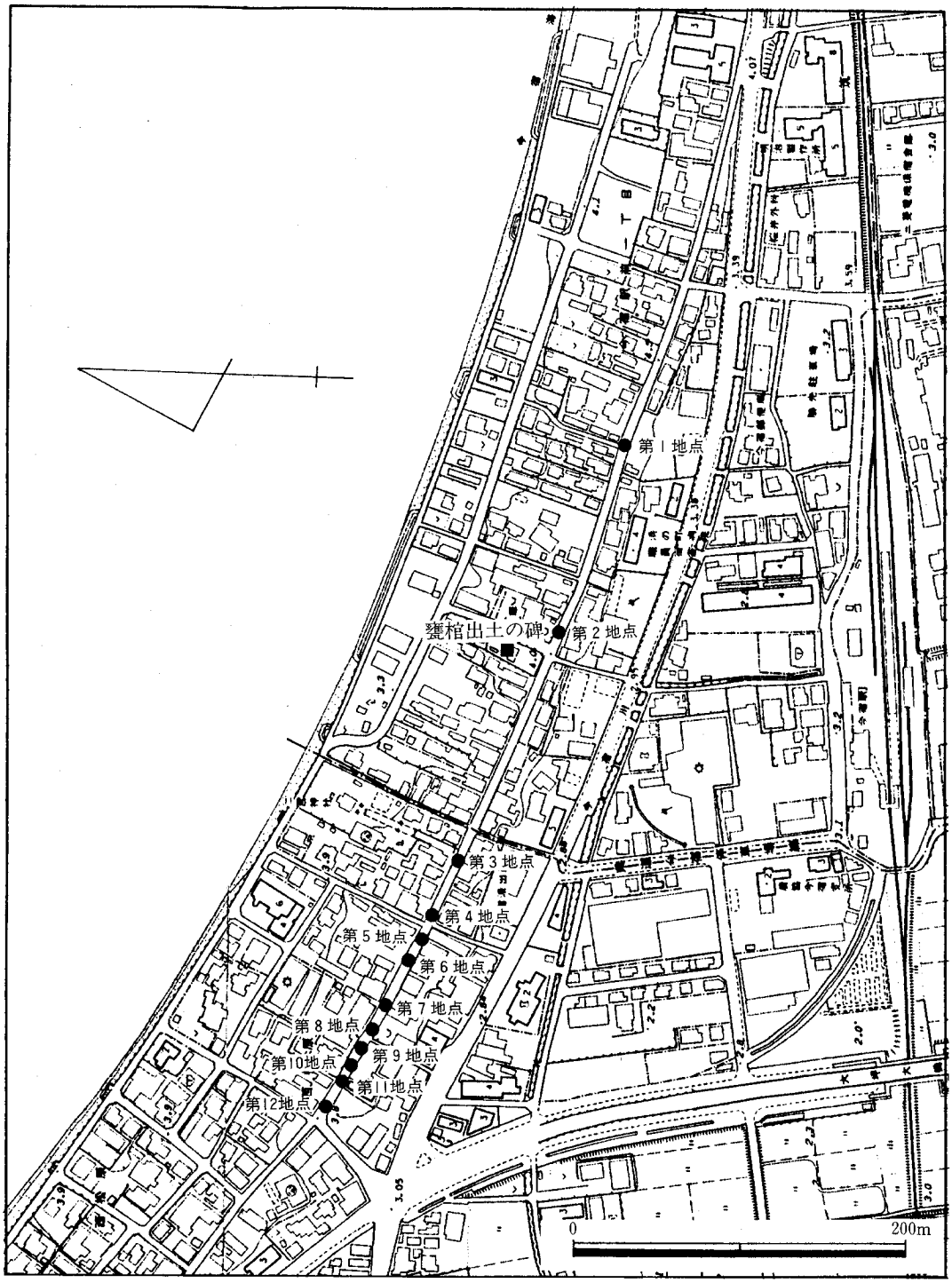


Fig. 8　第1次調査地点位置図（縮尺1/4,000）

2．遺物説明

(1) 第１地点出土遺物（Fig. 9）

土師器・高坏（１・２）　古墳時代の土器である。１の坏部はソケット式である。復原口径は17.4cmを測る。坏底部で，体部との境に段がつく。内外面は横ナデ仕上げである。胎土に砂粒を少量を含み，暗茶褐色を呈する。２は脚部である。復原底径14.4cmを測る。裾部は大きく広がる。内外面は横ナデ仕上げである。黄色を帯びた茶灰色を呈する。焼成はややあまい。

(2) 第２地点出土遺物（Fig. 9）

この地点は，Fig.23・24で示す通り，甕棺墓が８基存在した。詳細は後述を参照されたい。

土師器・甕（３・４）　口縁部をやや内弯ぎみに外反させ，端部を上下につまみ出して水平に仕上げている。肩は張らない。復原口径は13.8cm，18.3cmを測る。内面はヨコ方向，外面はタテ方向にハケ目調整を施す。胎土は細かく，暗茶灰色を呈する。古墳時代の土器である。

甕棺（Fig.23・24），石製品・石斧（Fig.27－１・２・４）　46ページを参照。

(3) 第３地点出土遺物（Fig. 9）

弥生土器・器台（５・６）　口径13.0・13.0cm，器高15.8・16.7cm，底径14.5・15.0cmを測る。口縁部は外反し，脚部は外に広がっている。５・６は同じタイプである。５の内面はヨコ方向，外面はタテ方向にハケ目調整を施す。６の口縁部内面はヨコ方向にハケ目調整を施す。頸部内面にはしぼり痕が顕著に見られ，指ナデを施している。外面には，５本単位のタタキ目を施す。５・６共に暗茶灰色を呈する。弥生時代終末期の土器である。

(4) 第４地点出土遺物（Fig. 9・10）

この地点は弥生時代中期の土器が多量に出土している。特に甕の点数は多い。

弥生土器・蓋（７）　大型の甕形土器の蓋と思われる。底径29.7cm，器高13.6cmを測る。上部にツマミ部を造り出している。外面にタテハケ調整を施す。茶灰色を呈する。

高坏（８・15）　８は坏部片である。口縁端部は断面形がコの字形である。口縁直下にゆるい段をもつ。体部は膨らみをもたず，直線的に延びる。復原口径24.0cmを測る。外面全面に丹塗りを施す。外面はタテ方向のハケ目調整を施しているが，磨滅している。色調は茶灰色を呈する。弥生時代終末期の土器である。15は脚部である。脚端部がわずかに外に広がる。底径8.8cmを測る。外面に７本単位のハケ目調整を施す。内面にはしぼり痕が残る。胎土は粗く，暗茶褐色を呈する。

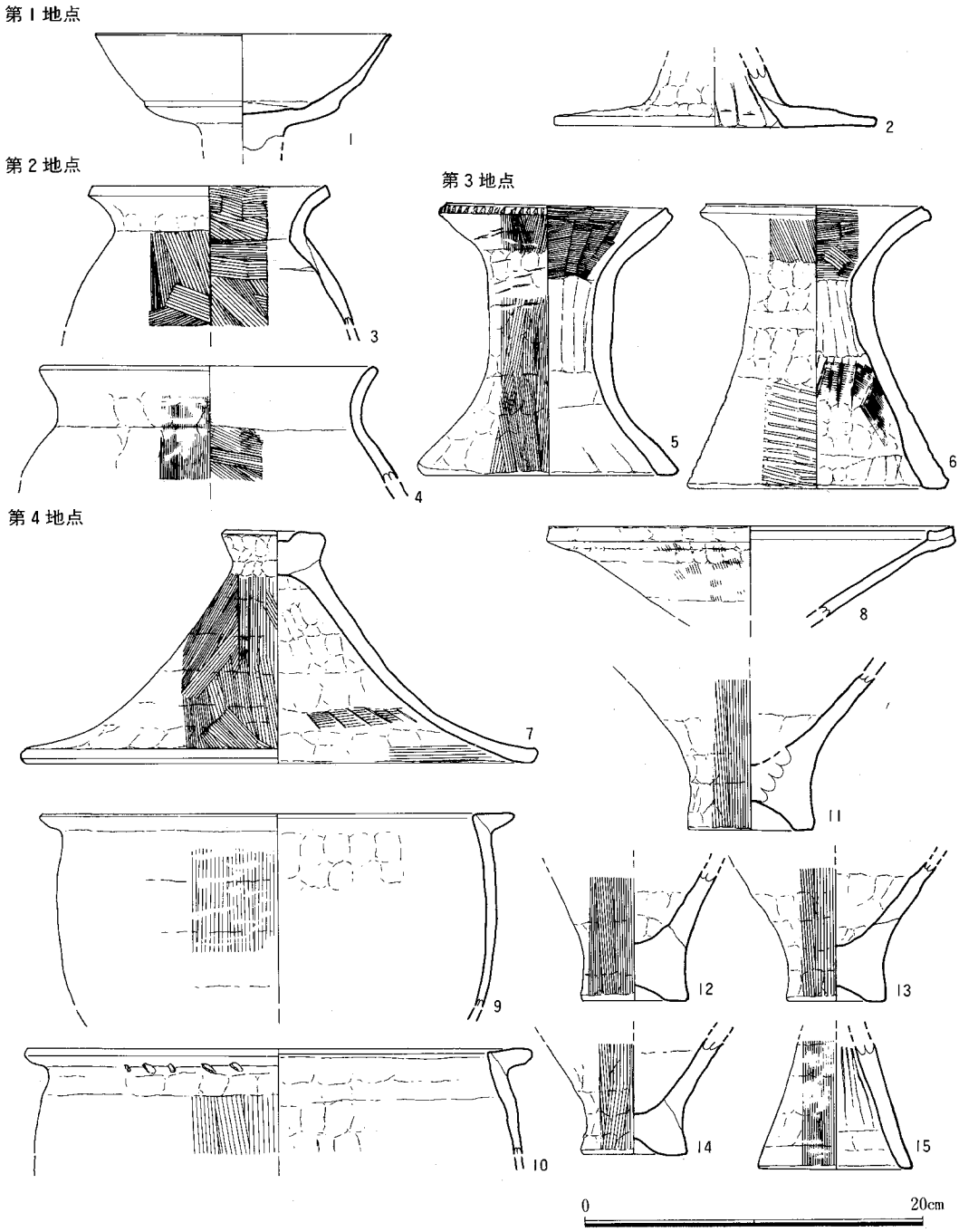


Fig. 9　第1～4地点出土遺物実測図（縮尺1/4）

甕（9～14・16～25）　9・10・16～19・21～25は，口縁部が逆L字状の口縁部片。9・10・16～18の口縁部は平坦であるが，19・23は丸みをもっている。16・22は胴部が張り気味で，他は張らない。何れも外面には8～10本のタテ方向のハケ目調整を施す。内面は指ナデ調整である。10は口縁部外面直下に刻目状の窪みが一巡している。復原口径は20.0～29.8cmの範囲である。何れも胎土は細かく，暗茶灰色～茶灰色を呈する。25は胴部下位に，断面三角形の突帯を1条貼りつけている。外面は丹塗りで，ヘラミガキを施している。内面はナデ仕上げである。復原口径は29.8cmを測る。11～14・20は底部片で，上げ底である。底径は5.3～7.4cmを測る。何れも暗茶灰色を呈する。20は，内面下位に段がつく。外面は9本単位のタテ方向のハケ目調整，内面はナデ仕上げである。暗茶褐色を呈する。いずれも弥生時代中期の土器である。

石製品・模造鏡（Fig.26－58）　42ページを参照。

(5)　第5地点出土遺物（Fig.11）

弥生土器・甕（26～28）　26は鋤形の口縁部である。口縁端部が下がり気味で，その端部には刻目を施す。頸部にM字形の突帯を1条有する。全面に丹塗りを施し，復原口径31.8cmを測る。胎土に微砂を含み，赤褐色を呈する。27の口縁部は断面三角形を呈し，丸みを帯びる。体部上位に1条の断面三角形の突帯を有する。突帯と口縁端部に刻目を施す。内面はナデ仕上げである。暗茶灰色を呈し，胎土は粗い。28は逆L字形の口縁部である。外面には8本単位のハケ目調整を施す。復原口径は24.0cmを測る。暗茶灰色を呈し，胎土は細かい。29は底部片で，上げ底である。底径6.6cmを測る。外面に8本単位のタテ方向のハケ目調整を施す。胎土は精良で，黒褐色を呈する。

壺（30・31）　底部片で，上げ底である。体部は，30が直線的に，31は内弯ぎみに立上がる。内面はナデ仕上げされている。底径10.0cm・11.0cmを測る。胎土は細かく，内面は暗灰色，外面は赤味をおびる。

土師器・壺（32・33）　32は口縁部片である。口縁端部は強く外反し，稜をつくる。復原口径は13.8cmを測る。色調は暗茶灰色で，焼成は良好である。33は口縁部片である。復原口径9.0cmを測る。胎土は細かく，暗茶灰色を呈する。

高坏（34）　脚部片である。裾部が大きく広がり，器高は低い。復原底径は14.8cmを測る。内面はヨコ方向，外面はタテ方向にハケ目調整を施す。胎土は細かく，暗茶灰色を呈する。

坏（35）　内外面はナデ調整である。口径14.4cm，器高6.2cmを測り，丸底である。体部内弯ぎみに立上がる。胎土は精良で，暗茶灰色である。

土製品・土錘（Fig.25・26）　41・42ページ，**石製品・模造鏡**（Fig.26－56・57）　42ページ，**石斧**（Fig.27－3）　46ページ参照。

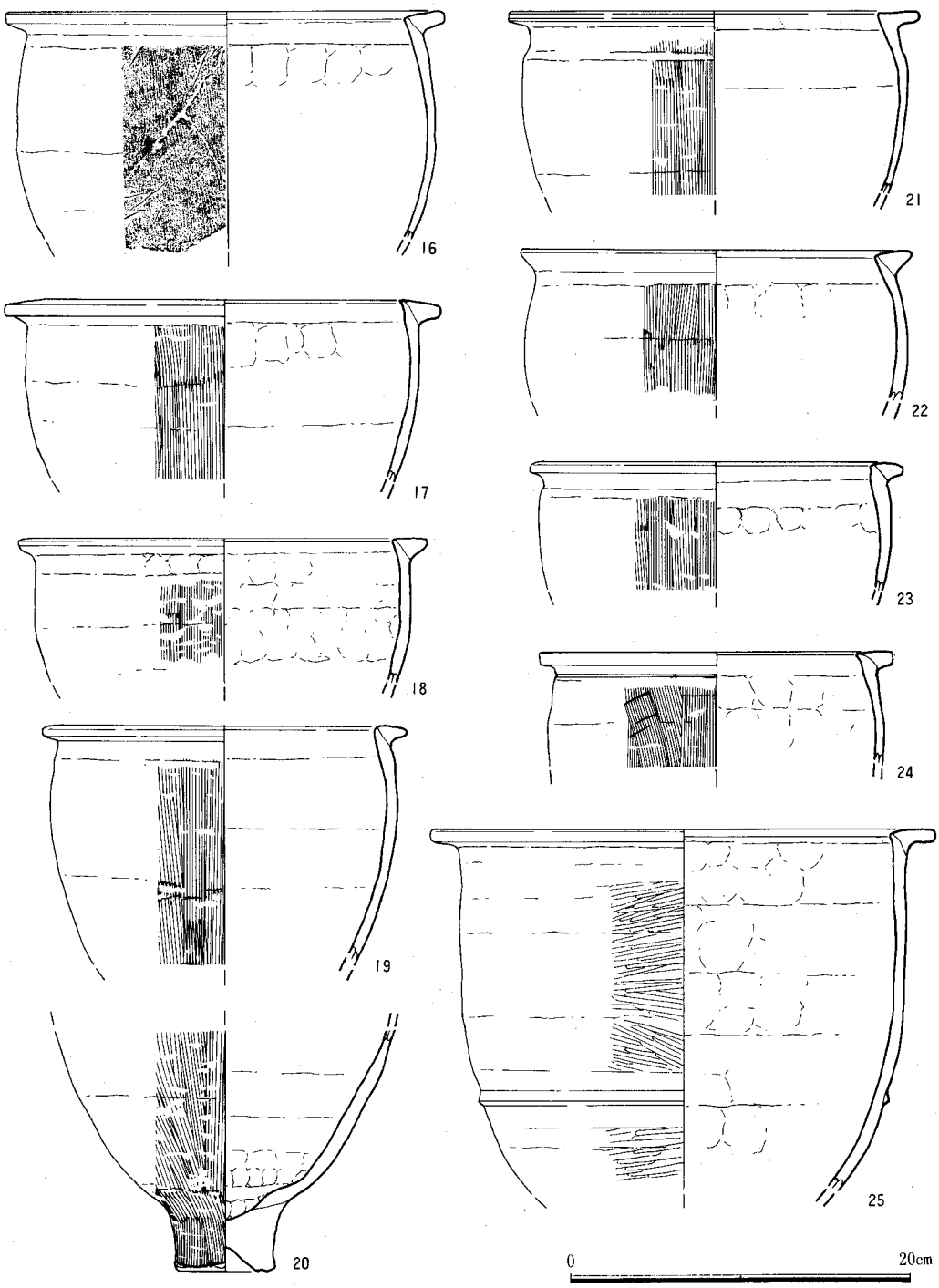


Fig.10　第４地点出土遺物実測図（縮尺1/4）

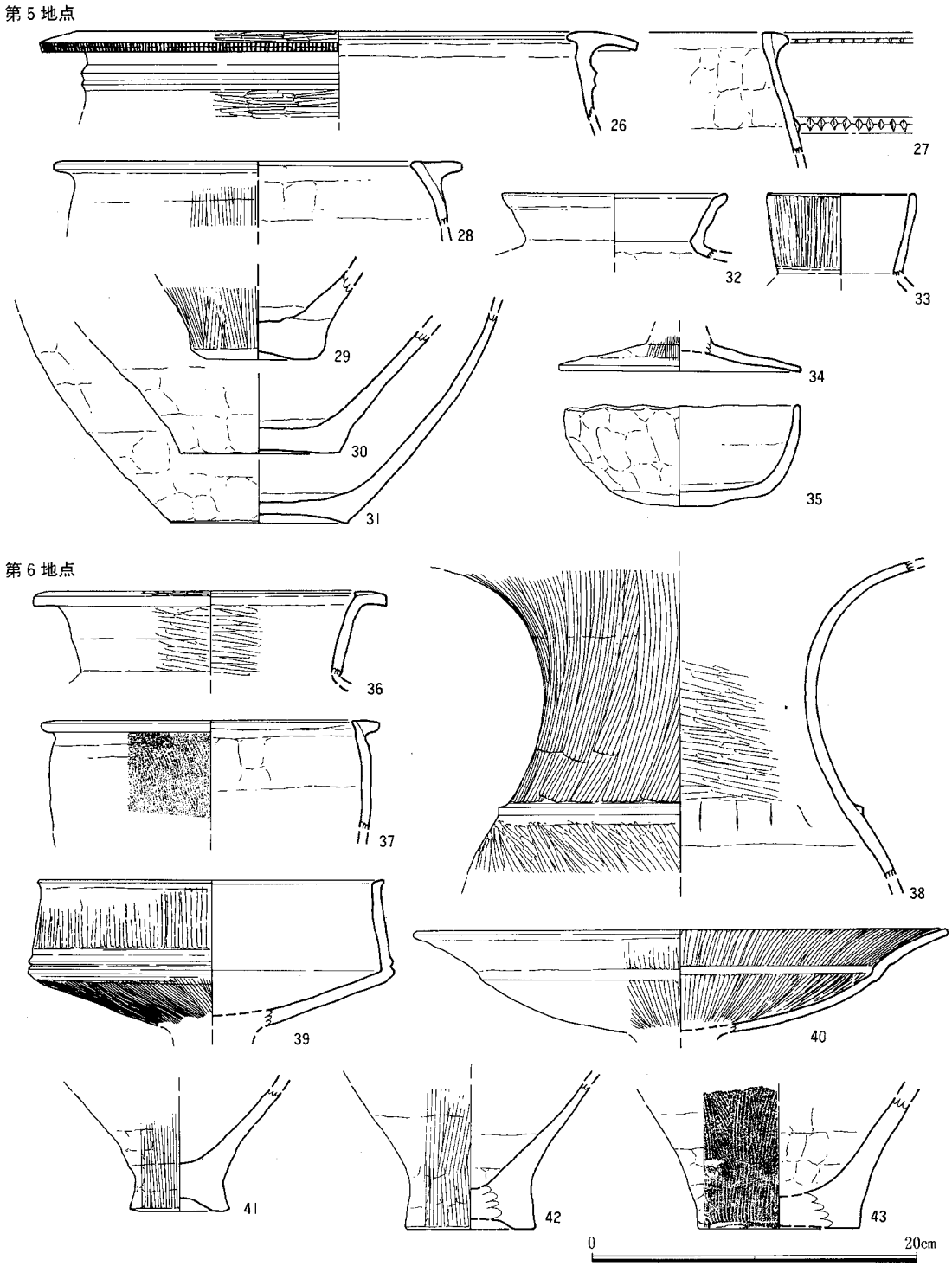


Fig.11　第５・６地点出土遺物実測図（縮尺1/4）

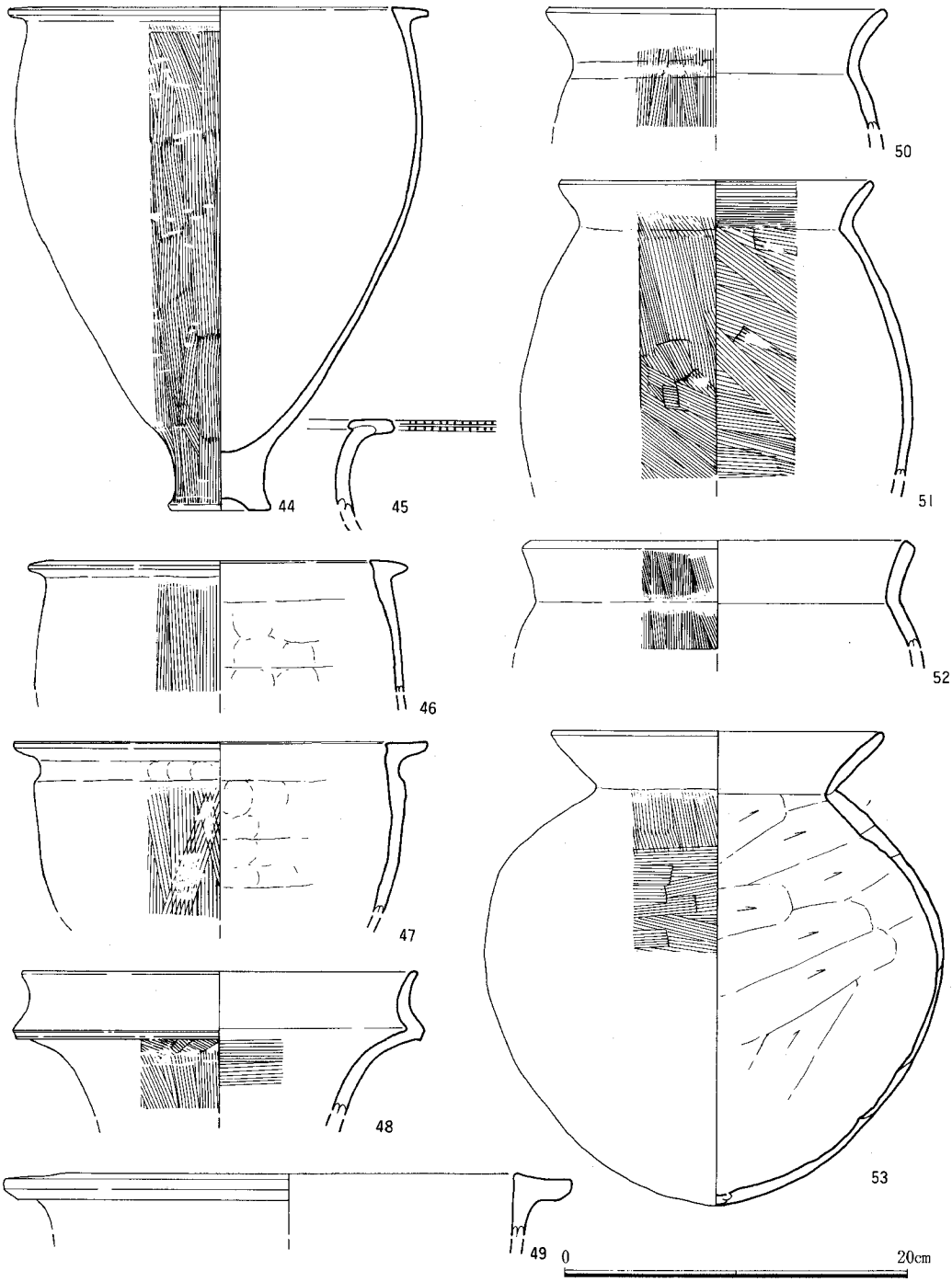
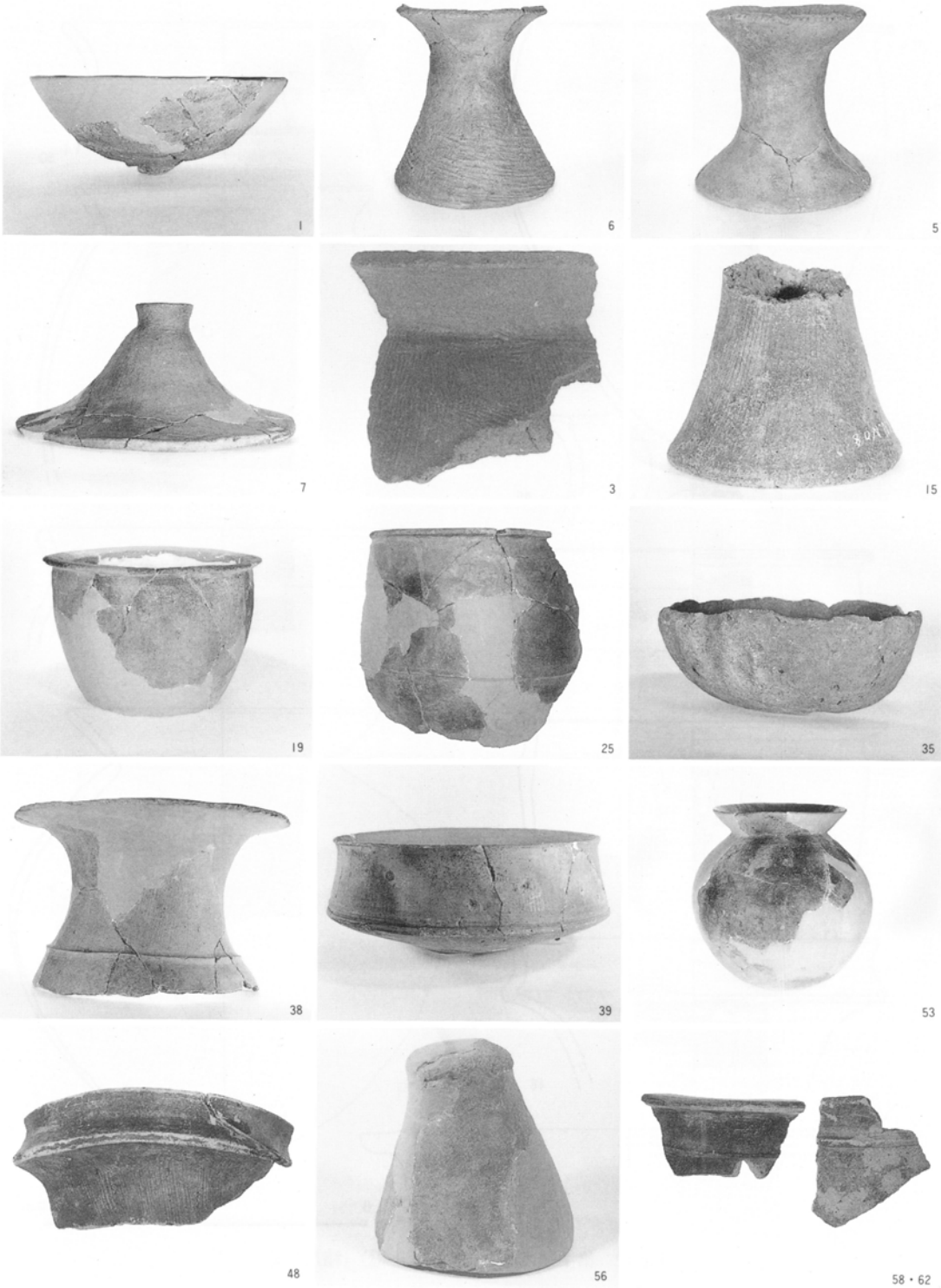


Fig.12　第７地点出土遺物実測図①（縮尺1/4）



第１次調査出土遺物①

数字は実測図番号に一致する

(6) 第6地点出土遺物（Fig.11）

弥生時代の中期の土器が出土している。

弥生土器・甕（36・37・41～43）　36・37は逆L字型の口縁部である。体部は口縁から直線的にのびる。肩は張らない。復原口径19.4cmを測る。外面は8～9本単位のタテ方向のハケ目調整を施す。色調は暗茶灰色である。41～43は底部片である。41・42は上げ底で，体部は直線的にのびる。43は平底である。底径5.3・7.9・9.9cmを測る。何れも外面にタテ方向，7～10本単位のハケ目調整を施す。内面はナデ仕上げである。色調は暗茶褐色である。

壺（38）　頸部片で，口縁部は大きく開く。外面は丹塗りで，タテ方向に10本単位のハケ目調整を施す。頸部には，断面三角形状の突帯を1条施す。内面はヨコ方向にハケ目調整がみられる。胎土は精良で，茶褐色を呈する。弥生時代中期の土器である。

高坏（39・40）　坏部である。39は，体部と底部の境に小さな突帯を2条有する。体部は突帯から内傾気味に立ち上がる。口径21.3cmを測る。外面は8本単位のハケ目調整を施す。40は，口縁部が大きく外に開く。底部と口縁部の境に段をもつ。底部は内弯している。復原口径は32.5cmを測る。内面にタテ方向に8本単位のハケ目調整を施す。外面もハケ目調整と思われる。胎土に砂粒を少し含み，茶褐色を呈する。弥生時代終末期の土器である。

石製品・石斧（Fig.27－5・6，Fig.28－9・11）　46・47ページを参照。

(7) 第7地点出土遺物（Fig.12・13）

弥生土器・甕（44～47・49・55）　44～47・49は逆L字型の口縁部である。44・45・47は，口縁部が平坦であり，46・49は口縁端部がやや下り気味である。44は口径24.4cm，底径6.1cm，器高29.2cmを測る。上げ底である。45は口縁端部に刻目を施す。体部は強く内弯する。46・47・49は，復原口径22・23.9・32.9cmを測る。胴部は張らずに，体部はやや内弯気味にのびる。何れも外面に6～8本単位のハケ目を施す。内面はナデによる仕上げをされている。色調は暗茶灰色を呈している。55は底部片で，上げ底である。底径6.3cmを測る。下位に径1.6cmの虫喰い穴がある。外面に7本単位のタテ方向のハケ目調整を施している。色調は暗茶灰色である。何れも弥生時代中期の土器である。

壺（48・54）　48は口縁部に明確な稜をもつ複合口縁壺である。口縁端部は外反し，端部を丸

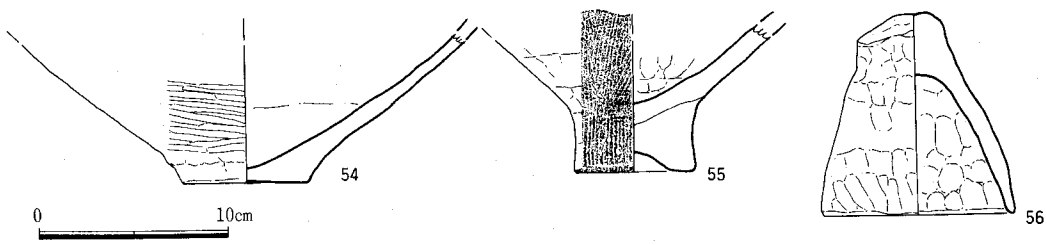


Fig.13　第7地点出土遺物実測図②（縮尺1/4）

く仕上げている。復原口径23.1cmを測る。外面にはタテ方向の７本単位のハケ目調整を施す。内面はヨコ方向にハケ目調整を施す。色調は暗茶灰色である。弥生時代後期の土器である。54は底部片で，平底である。体部は内弯ぎみに外反しており，底径6.8cmを測る。外面はヘラミガキを施している。内面はナデ仕上げである。

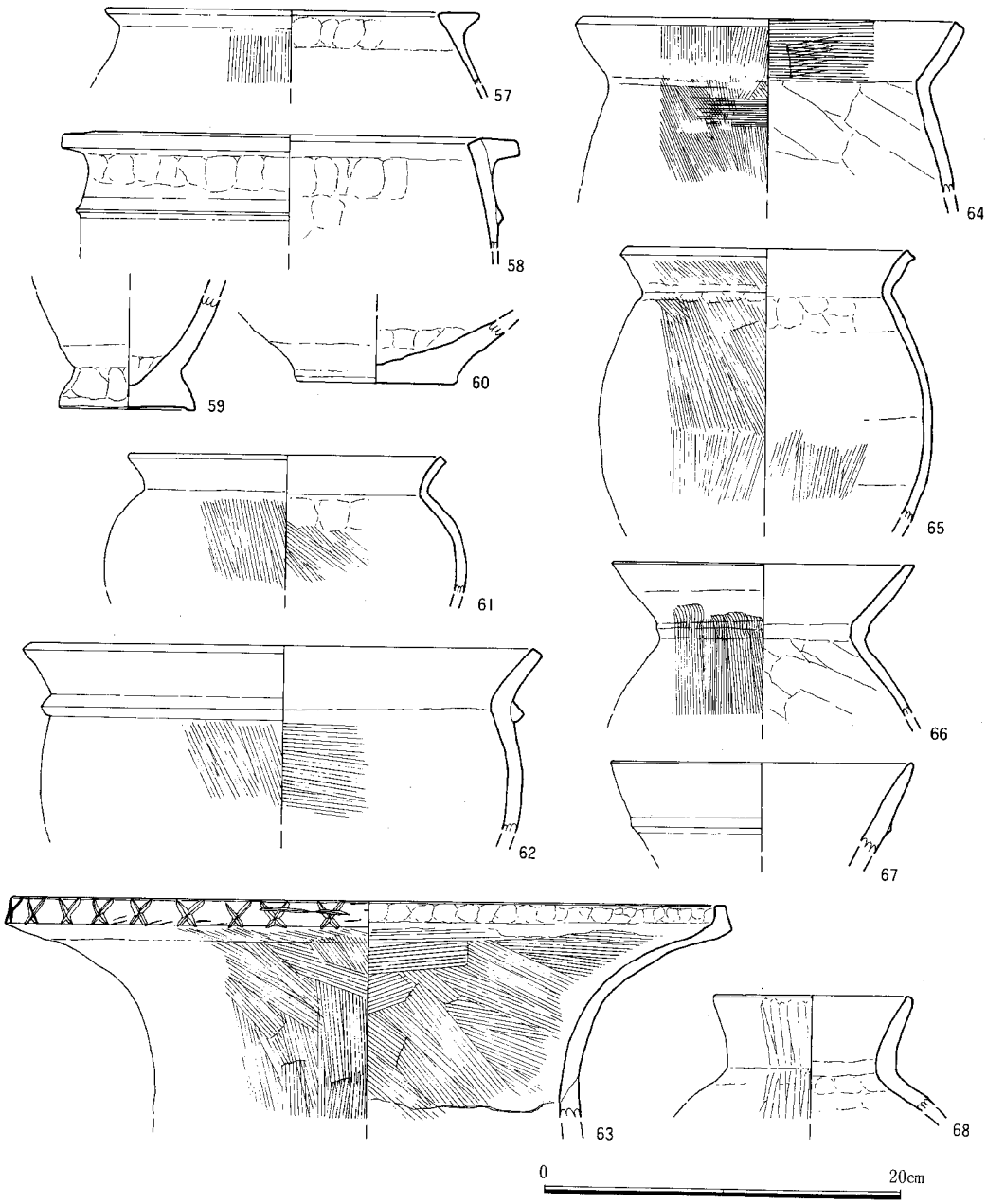


Fig.14　第８地点出土遺物実測図①（縮尺１/４）

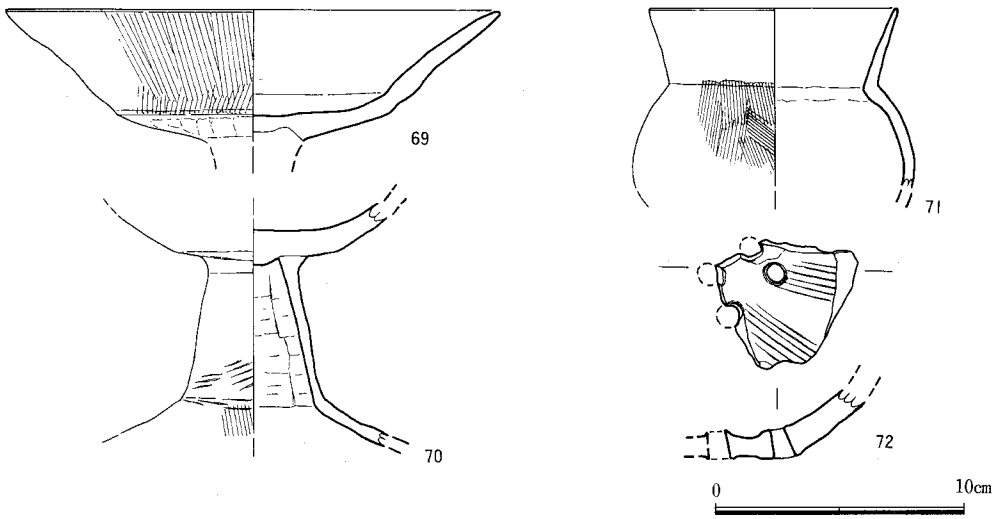


Fig.15　第８地点出土遺物実測図②（縮尺1/3）

支脚（56）　器形に歪みがある。脚部はやや内傾気味である。底径10.0cmを測る。内外面共に指頭圧痕が残り，指ナデ仕上げをしている。茶灰色を呈する。

土師器・甕（50～53）　50～52は口縁部を外反させ，端部を水平に仕上げる。肩はあまり張らない。復原口径19.5cm・18.0cm・22.0cmを測る。内外面共にハケ目調整を施す。８～９本単位で，外面はタテ方向に，内面はヨコ方向である。暗茶灰色を呈する。53は口縁部を強く外反させ，端部を丸く仕上げている。肩は強く張り，胴部に膨らみをもつ。復原口径19.4cm，器高27.6cmを測る。胴部内面はヘラケズリを施す。外面はタテハケ調整後，胴部中位にヨコハケを施す。布留式併行期の土器である。

(8)　第８地点出土遺物（Fig.14・15）

弥生時代中期から終末期の土器と共に古式土師器の甕・高坏・丸底が出土している。

縄文土器・弥生土器・甕（57～60）　57・58は逆L字形の口縁部片である。58は口縁部下に，断面三角形状の突帯を１条施す。頸部には指頭圧痕が残る。復原口径20.7cm・26.6cmを測る。59・60は底部片である。指頭圧痕が残る。復原底径は7.7cm・8.8cmを測る。59は縄文土器である。

壺（61～63）　61・62の口縁部は外反し，端部は平坦に仕上げる。61は肩が張るタイプである。62は頸部に断面三角形状の突帯を１条有する。共に内外面はハケ目調整を施す。口径17.5cm・28.3cmを測る。弥生時代後期の土器である。63は口縁片である。口縁部は端部を肥厚させ，平坦な側面を形成する。口縁端部は×印状に刻目を施す。外面は頸部をヨコハケ調整，その下はタテ方向のハケ目調整を施す。内面はヨコハケ調整を施す。口縁部内面はナデ仕上げである。復原口径39.7cmを測る。弥生時代終末期の土器である。

土師器・甕（64～66）　64は口縁部が内弯気味に外反する。65・66の口縁部は外反する。何れも端部は平坦に仕上げる。頸部に指頭圧痕が残る。外面はタテ方向のハケ目調整，内面はヘラケズリを施している。復原口径は21.0cm・15.9cm・17.1cmを測る。

壺（67・68）　67は直線的に外反した口縁部片である。端部は丸く仕上げる。下位に断面三角形状の突帯を１条有する。復原口径は17.0cmを測る。茶灰色を呈する。68は口縁部は外反し，端部は丸く仕上げられている。頸部内面は指頭圧痕が残る。外面にはヘラミガキを施す。復原口径11.0cmを測る。暗茶灰色を呈する。

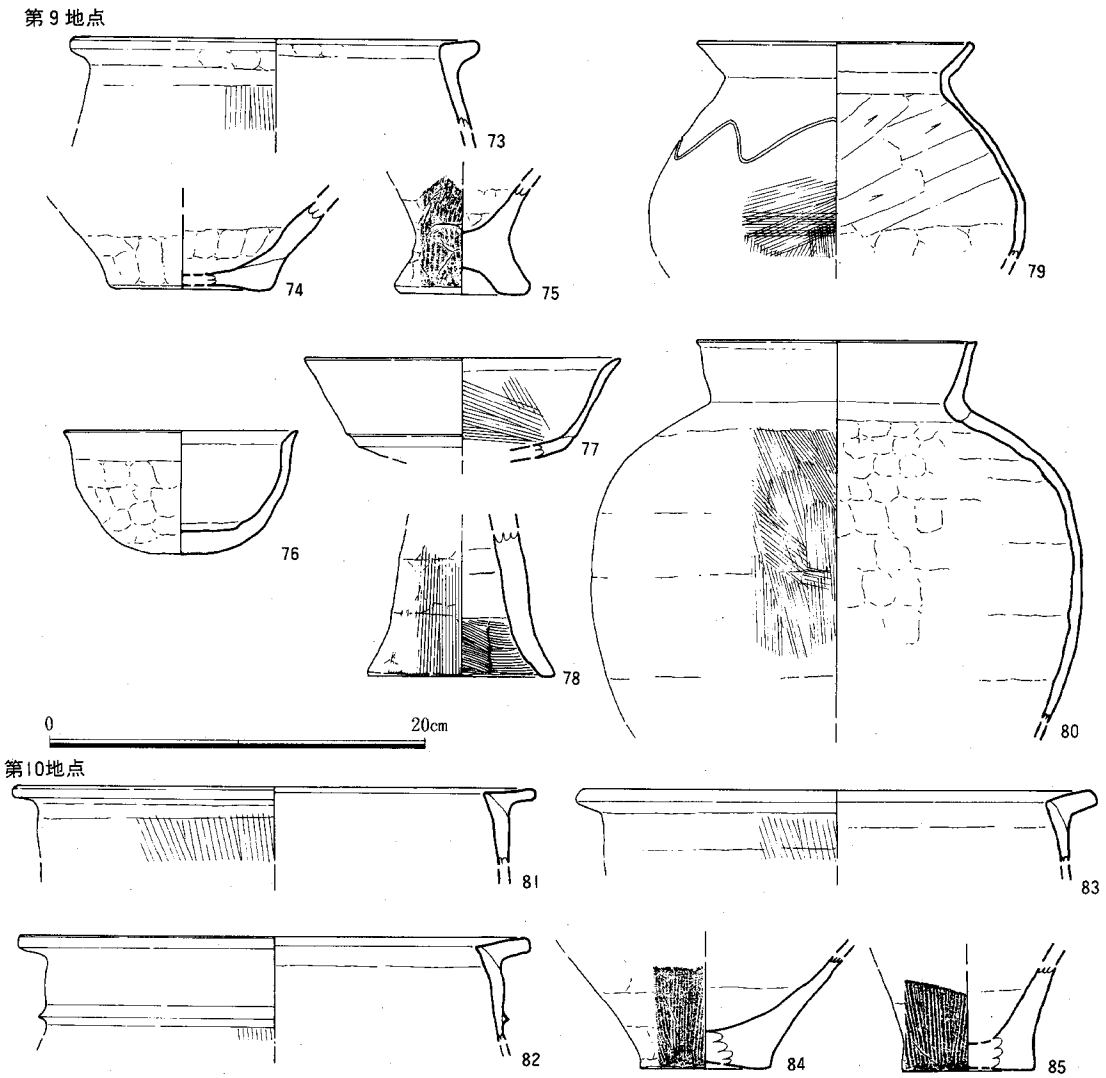


Fig.16　第９・10地点出土遺物実測図（縮尺1/4）

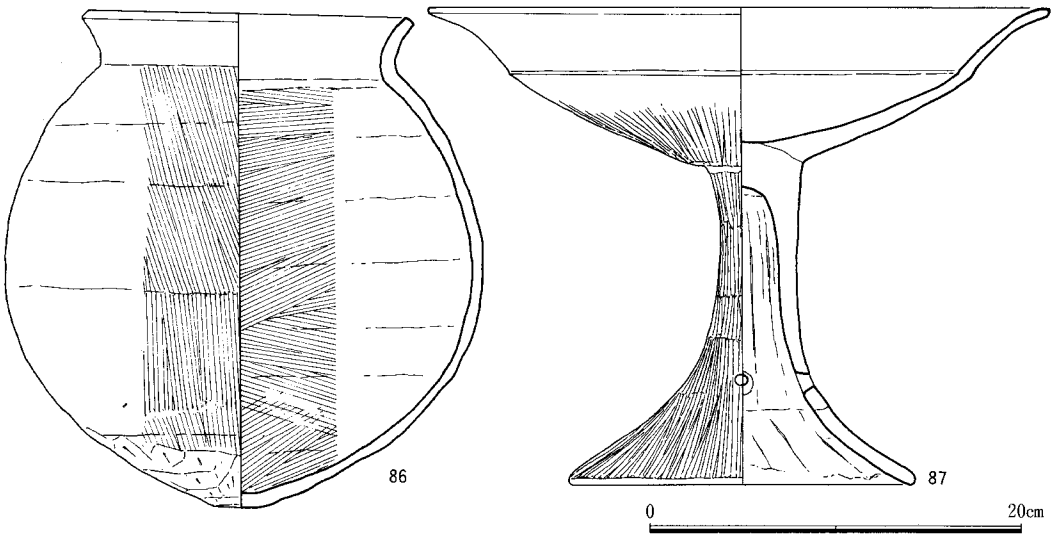


Fig.17　第11地点出土遺物実測図（縮尺１/４）

土師器・高坏（69・70）　69は坏部である。体部と底部の境に段がつき，体部は強く外反している。口縁端部は丸く仕上げる。外面にタテ方向のハケ目調整を施す。口径19.8cmを測る。暗茶灰色を呈する。70は口縁部・底部共に欠損している。灰黄色で，胎土は精良である。

壺（71）　口縁部は外反し，端部は丸く仕上げている。丸底である。外面はタテ方向のハケ目調整を施す。胴部内面はナデ調整である。復原口径10.2cm，復元高12.3cmを測る。

甑（72）　底部片である。径0.8cmの穿孔を４つ以上設けている。内面に５本以上のハケ目を施す。黒褐色を呈する。

石製品・石斧（Fig.28－10・12）・**石錘**（Fig.28－２）　47ページを参照。

(9)　第９地点出土遺物（Fig.16）

この地点は土師器を中心に出土している。

弥生土器・甕（73～75）　73は逆L字形の口縁片である。肩は張らない。外面はハケ目調整を施す。復原口径21.5cmを測る。74・75は底部片で，共に上げ底である。復原底径は8.0cm・6.8cmを測る。内面はナデ仕上げである。75は外面にタテ方向に９本単位のハケ目調整を施す。暗茶褐色を呈する。何れも弥生時代中期の土器である。

土師器・鉢（76）　体部は半球形をなし，口縁部は外反する。口径12.4cm，器高6.7cmを測る。内面はヨコナデ，外面はナデ調整である。茶褐色を呈する。

高坏（77・78）　77は口径16.9cmを測る。脚部を欠く。体部と底部の境に強い段をもち，体部は，外反している。口縁部は端反りである。内外面共にヨコナデ調整である。色調は暗灰青色

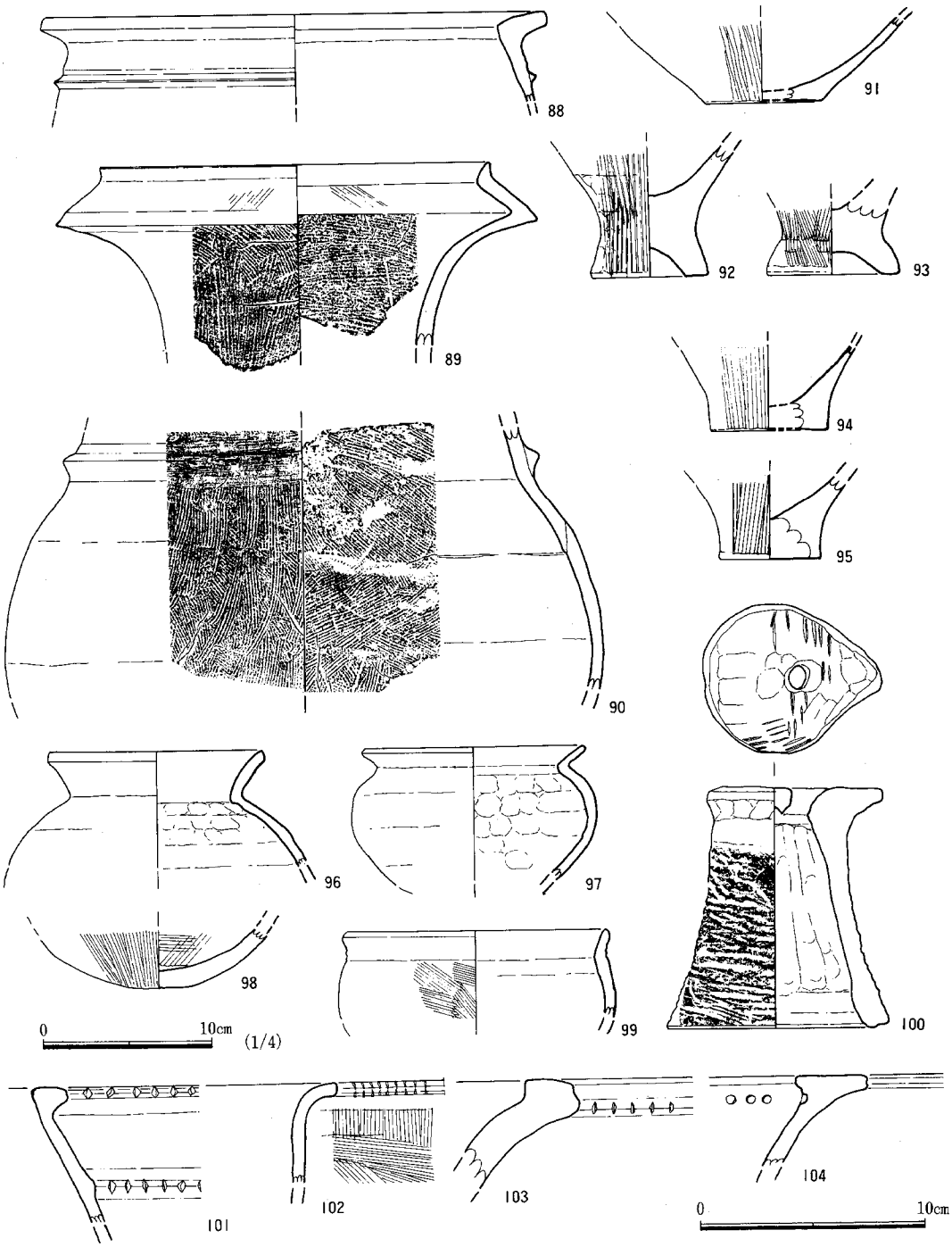


Fig.18　第12地点出土遺物・表採遺物実測図（縮尺1/4・1/3）

である。78は脚部である。裾部は外へ広がり，内面はヨコハケ調整である。底径9.8cmを測る。
甕（79・80）　口縁部は外反し，端部は水平に仕上げる。肩は張らないが，胴部は膨らむ。復原口径は14.9cm・14.9cmを測る。79は胴部外面に沈線で波状文を施している。内面はヘラケズリである。80の外面はタテ方向にハケ目調整を施し，内面ナデ仕上げである。暗茶褐色を呈し，細かい砂粒を含む。
土製品・土錘（Fig.25・26）　41・42ページを参照。

(10)　第10地点出土遺物（Fig.16）

弥生土器・甕（81～85）　81～83は逆L字形の口縁部である。口縁部の内側に強い稜をもっている。復原口径は27.3cm・26.8cm・27.2cmを測る。82は胴部上位に断面三角形の突帯を有する。何れも外面にタテ方向のハケ目調整を施す。84・85は底部片で，平底である。復原底径6.9cm・6.8cmを測る。外面は７～９本単位のタテ方向のハケ目を施す。弥生時代中期の土器である。
石製品・模造鏡（Fig.26－59）　42ページを参照。

(11)　第11地点出土遺物（Fig.17）

弥生土器・甕（86）　口縁部は外反し，端部は平坦に仕上げている。胴部下位は強く張る。復原口径17.1cm，器高26.3cm，底径3.0cmを測る。胴部外面はタテ方向に８本単位のハケ目を施し，内面はヨコ方向のハケ目調整を施す。弥生時代終末の土器である。
高坏（87）　口径33.3cm，器高25.4cm，底径18.3cmを測る。坏部は，体部と底部の境に段を有し，強く外反する。脚部の器高は高く，裾部は大きく広がる。脚部下位に，径0.7cmの穿孔が１ケ所施される。脚部外面に，タテ方向に７本単位のハケ目調整を施す。茶灰色を呈する。弥生時代終末期の土器である。

(12)　第12地点出土遺物（Fig.18）

弥生土器・甕（88・92～96）　88は逆L字形の口縁部片である。内側に少し傾く。頸部に断面三角形の突帯を１条有す。復原口径29.8cmを測る。色調は茶灰色を呈する。92～95は上げ底の底部片である。底径6.0～7.8cmを測る。何れも外面は７本単位のタテハケ調整である。
壺（89～91）　89は複合口縁壺である。口縁部外面に明確な段をもつ。口縁端部は小さく外反させる。復原口径23.3cmを測る。頸部外面には，８本単位のタテハケ調整を施す。内面はヨコハケ調整である。90は89と同一個体と思われる。肩部に断面三角形の突帯を１条貼り付けている。胴部は張るタイプである。調整は89と同じである。色調は暗茶灰色である。91は底部片である。平底で，体部は外に大きく開き，内面はナデ調整を施す。98は丸底の底部片である。外面はタテハケ調整，内面はヨコハケ調整である。

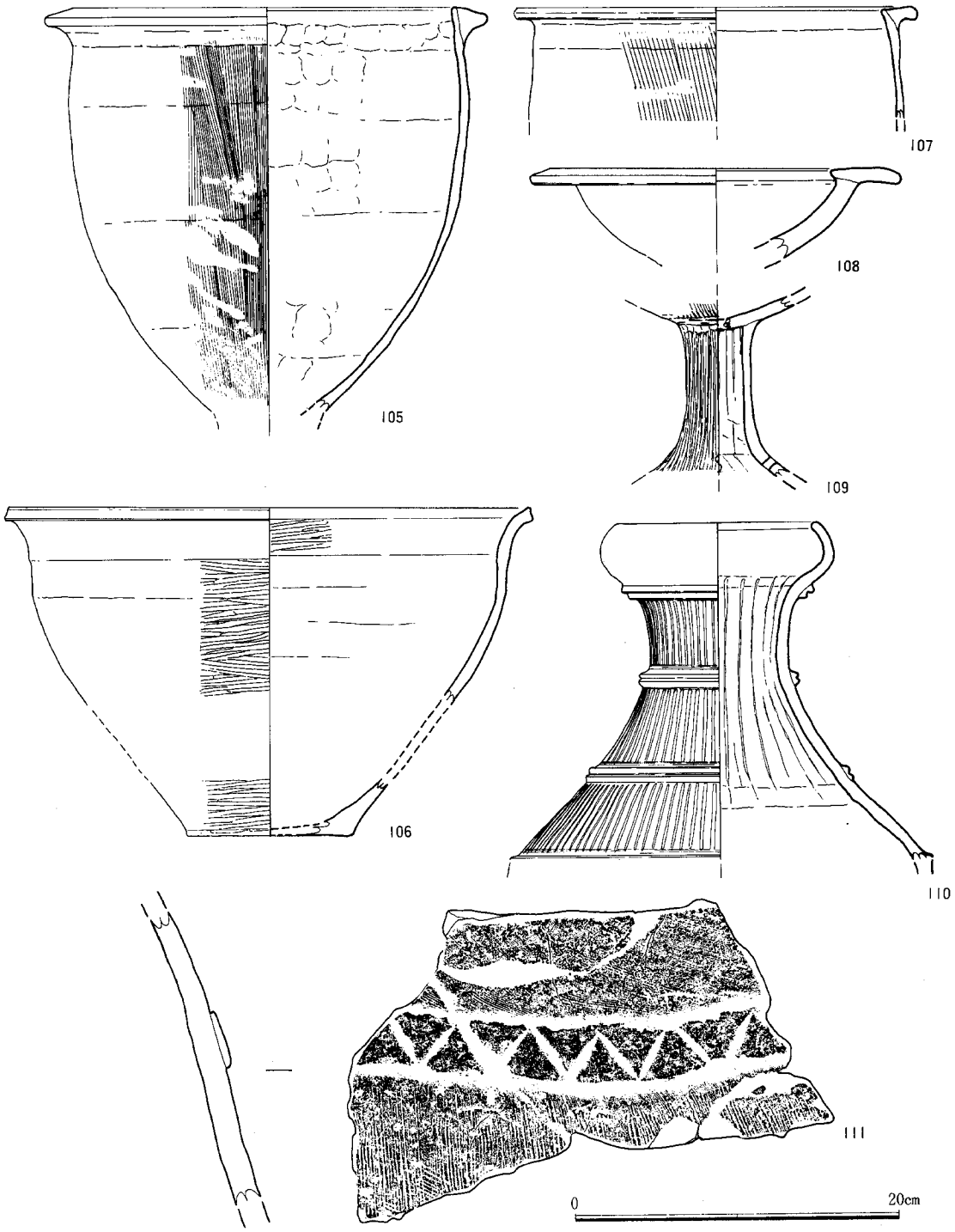


Fig.19　表採遺物実測図①（縮尺1/4）

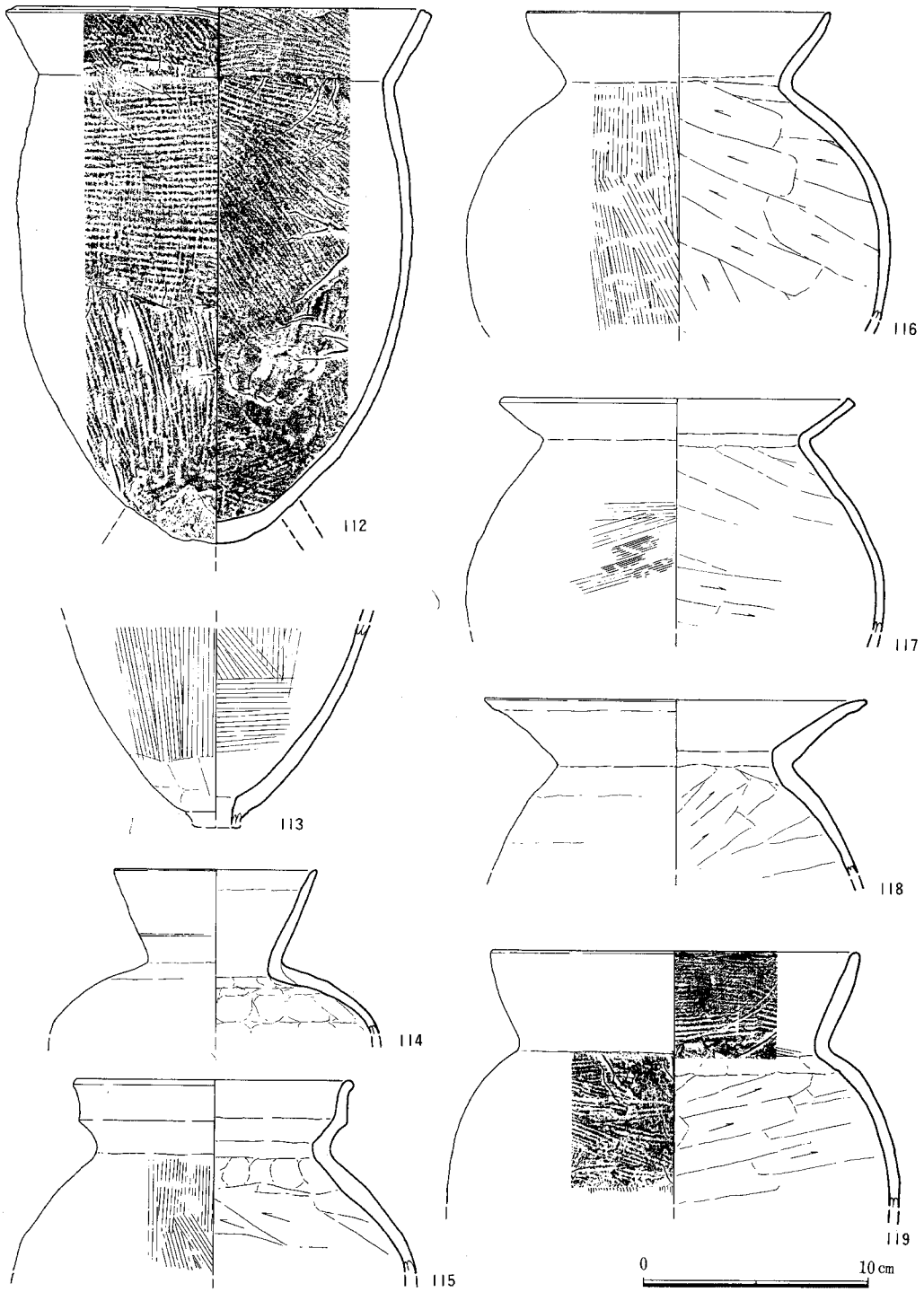


Fig.20　表採遺物実測図②（縮尺1/3）

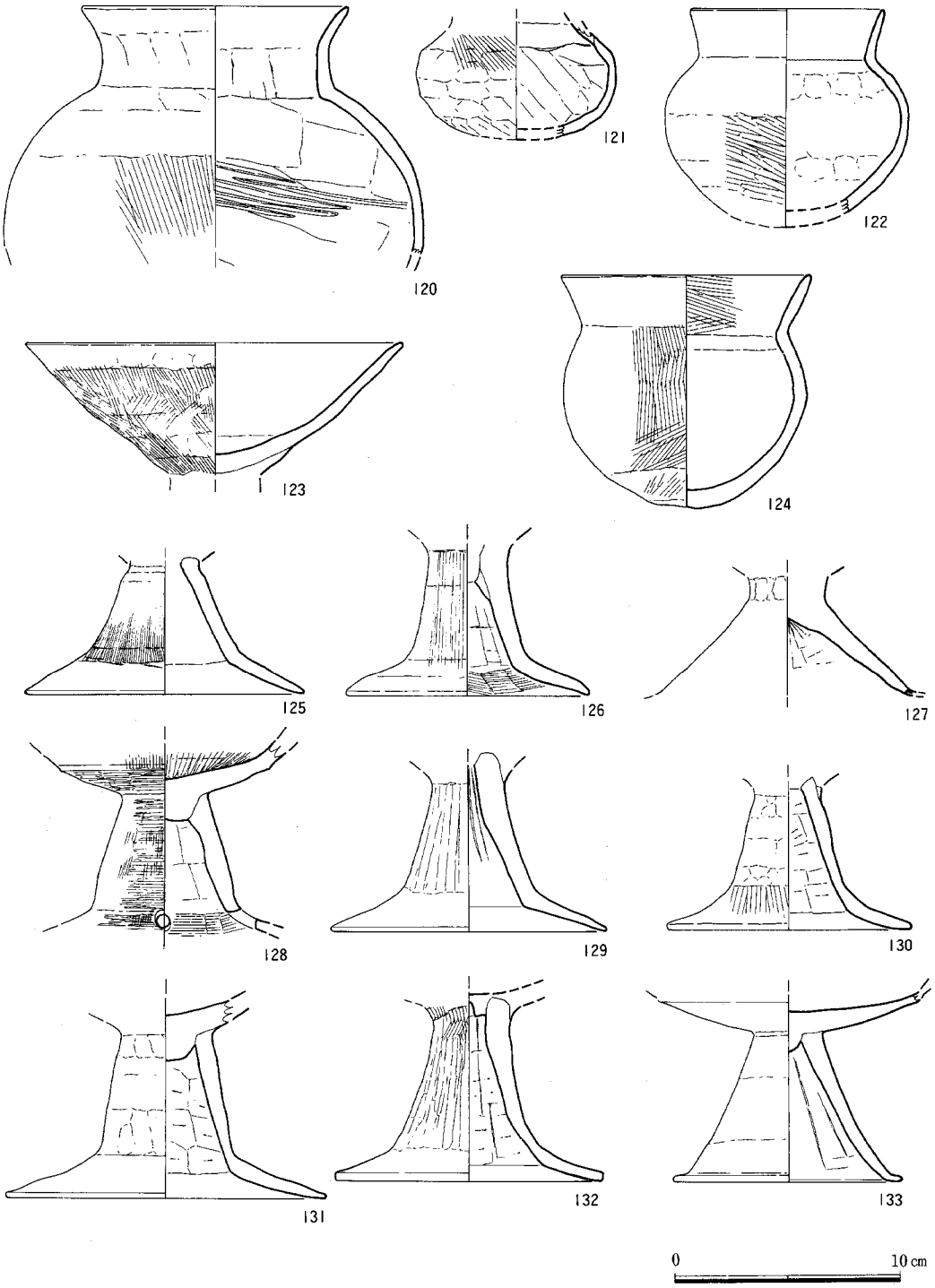
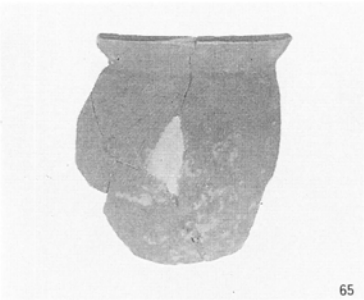
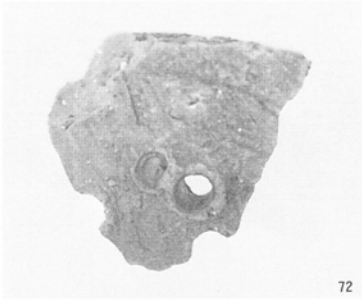
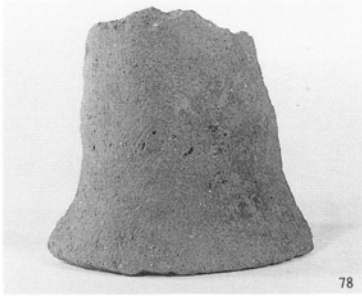
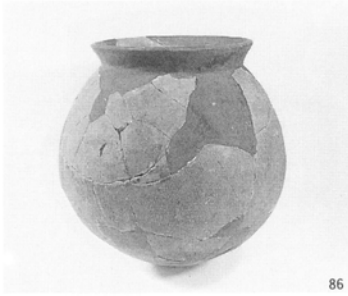


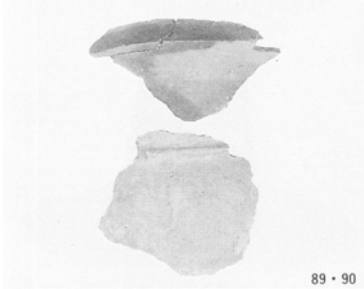
Fig.21　表採遺物実測図③（縮尺1/3）

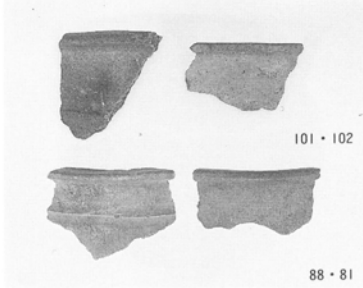


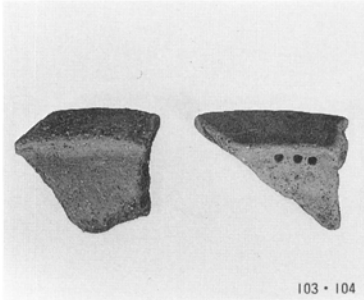






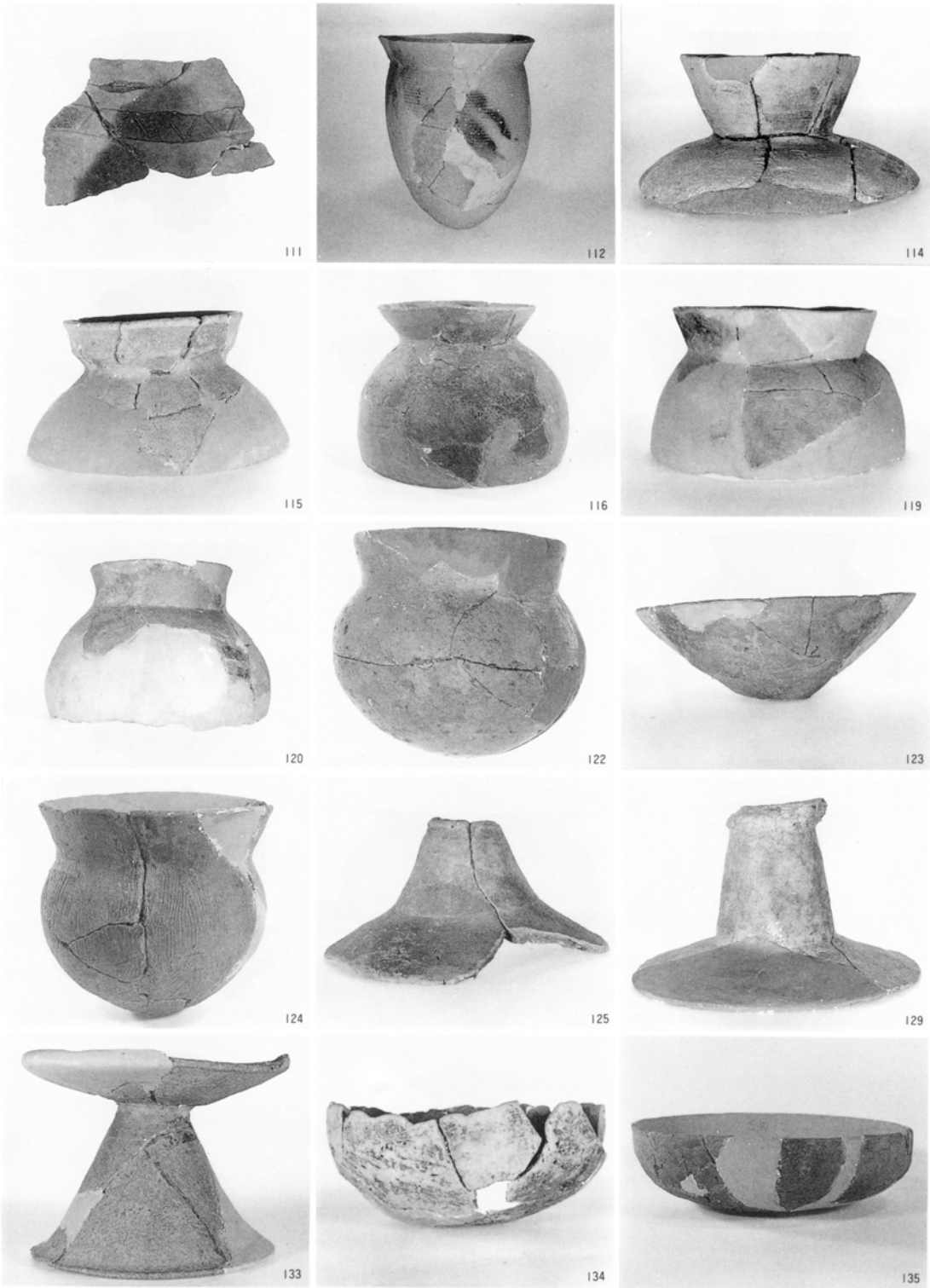






第１次調査出土遺物②

数字は実測図番号に一致する



第１次調査出土遺物③

数字は実測図番号に一致する

沓形器台（100）　口径19.5cm，器高14.3cm，底径12.5cmを測る。口縁部の一端に甕支えを作り出し，口縁部平坦面の中央に径2.1cmの穿孔を施す。裾部はわずかに外反する。外面はヨコ方向の平行叩きとナデ調整を施す。暗茶灰色を呈する。弥生時代後期末の土器である。

土師器・鉢（97・99）　97は，口縁部が大きく外反する。端部は平坦に仕上げている。復原口径12.6cm・13.0cmを測る。内面は指ナデ調整，外面はヨコナデ調整である。暗茶灰色を呈し，細かい砂粒を含む。99は，口縁部は緩やかに外反する。肩部は張らない。外面ヨコハケ調整である。復原口径15.3cmを測る。

(13)　表採遺物（Fig.18～21）

弥生土器・甕（101・102・105・107・111）　101・105・107は逆L字形の口縁部，102は外反する口縁部，105は口縁端部が下がり気味である。101は口縁端部に刻目を施す。101は口縁部直下に1条の突帯を貼り付けており，その突帯にも刻目を施す。105・107は復原口径27.5cm・24.4cmを測る。105・107は共に外面には7本単位のタテハケ調整を施す。101・102は黒灰色を呈する。111は胴部片である。帯状の突帯を1条有する。その表面には貝殻によるV字形の刻目を施す。外面は粗いタテハケ調整である。黒斑がある。

鉢（106）　口径32.3cm，器高20.4cm，底径10.2cmを測る。平底である。口縁部は外反する。外面はヘラミガキを施す。甕棺に用いられた蓋と考えられる。

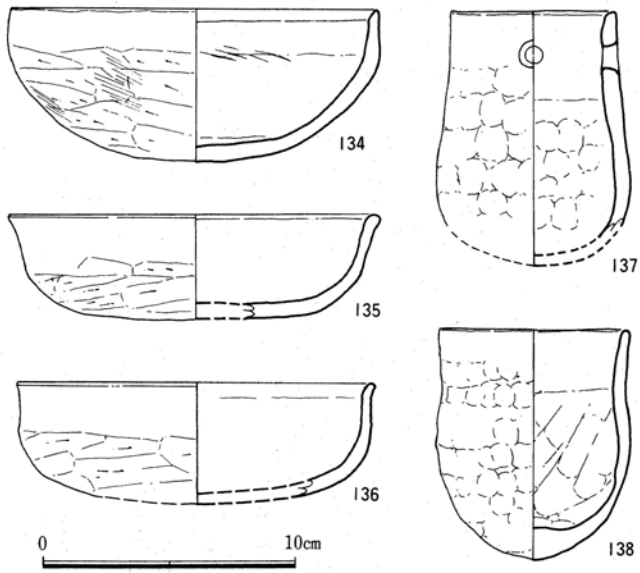
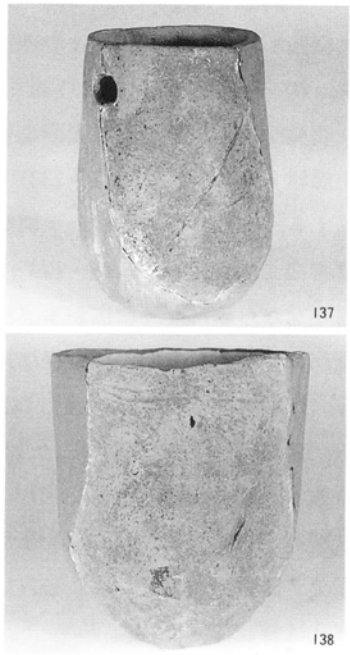


Fig.22　表採遺物実測図④（縮尺1/3）



数字は実測図番号に一致する

高坏（108・109）　108は口縁部が鋤形を呈する。口径23.2cmを測る。109は坏部・底部共に欠損している。脚部内面にしぼり痕がみられる。外面はヘラミガキ調整を施す。

壺（103・104・110）　103は口縁端部内側を肥厚させ，端部に刻目を施す。104はT字形口縁である。104は頸部内面に径0.4cmの刺突文を施す。110は袋状口縁壺。外面は丹塗りである。頸部が長く，４条のM字形の突帯を施す。突帯の間にはヘラによるタテ方向の暗文を配する。口径12.5cmを測る。

土師器・甕（112・116～119）　112は台付の片口土器である。口径18.2cm，器高24.2cmを測る。口縁部は外反し，端部は平坦に仕上げている。体部外面はヨコ方向にタタキを施し，その後にタテハケ調整を施す。内面はタケハケ調整である。色調は茶褐色を呈する。116～119は口縁部が外反するタイプである。116は内弯気味に外反する。118は直線的にのびる。口縁端部を，117は内側に，118は外側につまみ出している。調整は何れも，体部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリである。

甑（113）　底部・口縁部共に欠損している。内外面共にハケによるナデ調整である。

壺（114・115・120～122・124）　120は頸部がまっすぐ立上り，口縁端部は外反する。復原口径は14.6～17.3cmを測る。114は直口口縁の壺である。肩が張り，口縁部は外反する。復原口径は9.1cmを測る。内外面共にヨコナデ調整である。茶褐色を呈する。115は二重口縁壺である。口縁部は外反し，外面に段をもち，まっすぐ立上がる。復原口径12.3cmを測る。体部外面はタテハケ調整を施す。121・122・124は小型丸底壺である。121は胴部片であり，口縁・底部共に欠損している。122・124は半球形の体部で，口縁は外反する。口径8.6cm・11.2cmで，器高9.8cm，10.5cmを測る。122は外面ヨコナデ調整，内面は指ナデ調整である。124の外面にはタテハケ調整がみられる。暗茶褐色を呈する。

土師器・高坏（123・125～133）　123は脚部欠損。坏部口径は16.9cmを測る。体部は鉢状に外反する。体部外面はタテハケ調整後，ナデ仕上げを施している。暗茶灰色を呈する。125～133は脚部である。125・126・129・131は裾部が大きく広がるタイプである。130・132は筒部が内弯しながら裾部が外に広がるタイプである。133は裾部を欠いている。127はラッパ状を呈し，裾部には段をもたない。底径は10.2～14.4cmを測る。色調は茶褐色・暗茶褐色である。

坏（134～136）　復原口径は14.6・14.8・14.2cm，器高は6.2・4.2・4.8cmを測る。丸底である。口縁部は，134は直口し，135･136は端部を小さく外反させる。何れも内面はヨコナデ調整を施す。134は茶褐色，135・136は暗茶褐色を呈する。

土製品・蛸壺（137・138）　復原口径6.8cm・7.7cm，器高10.3cm・9.3cmを測る。内外面には，指ナデ調整を施している。137は，口縁部直下に径1.1cmの穿孔を施す。138は遺存状態が悪く，穿孔は確認できない。

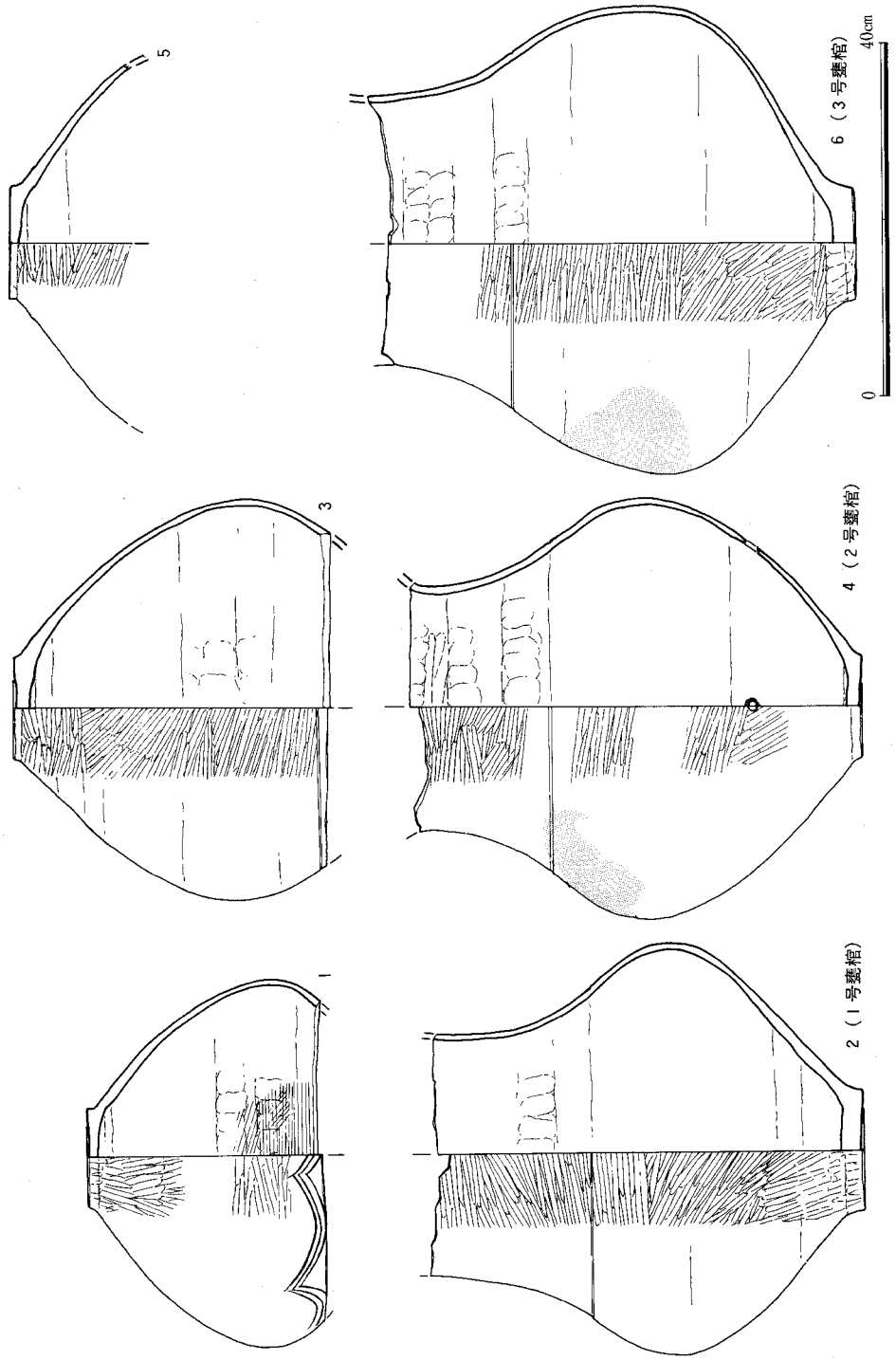


Fig.23　甕棺実測図①（縮尺1/8）

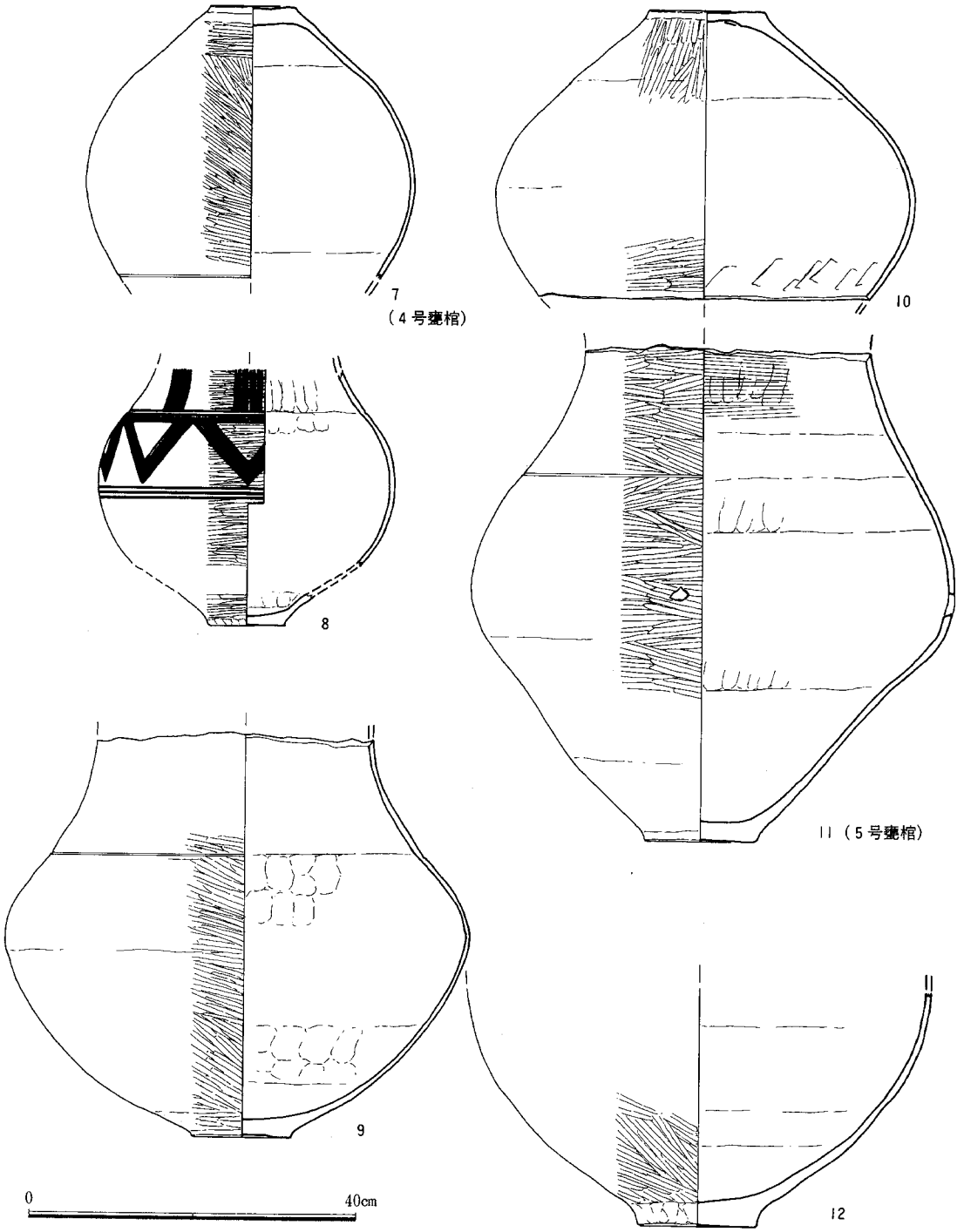
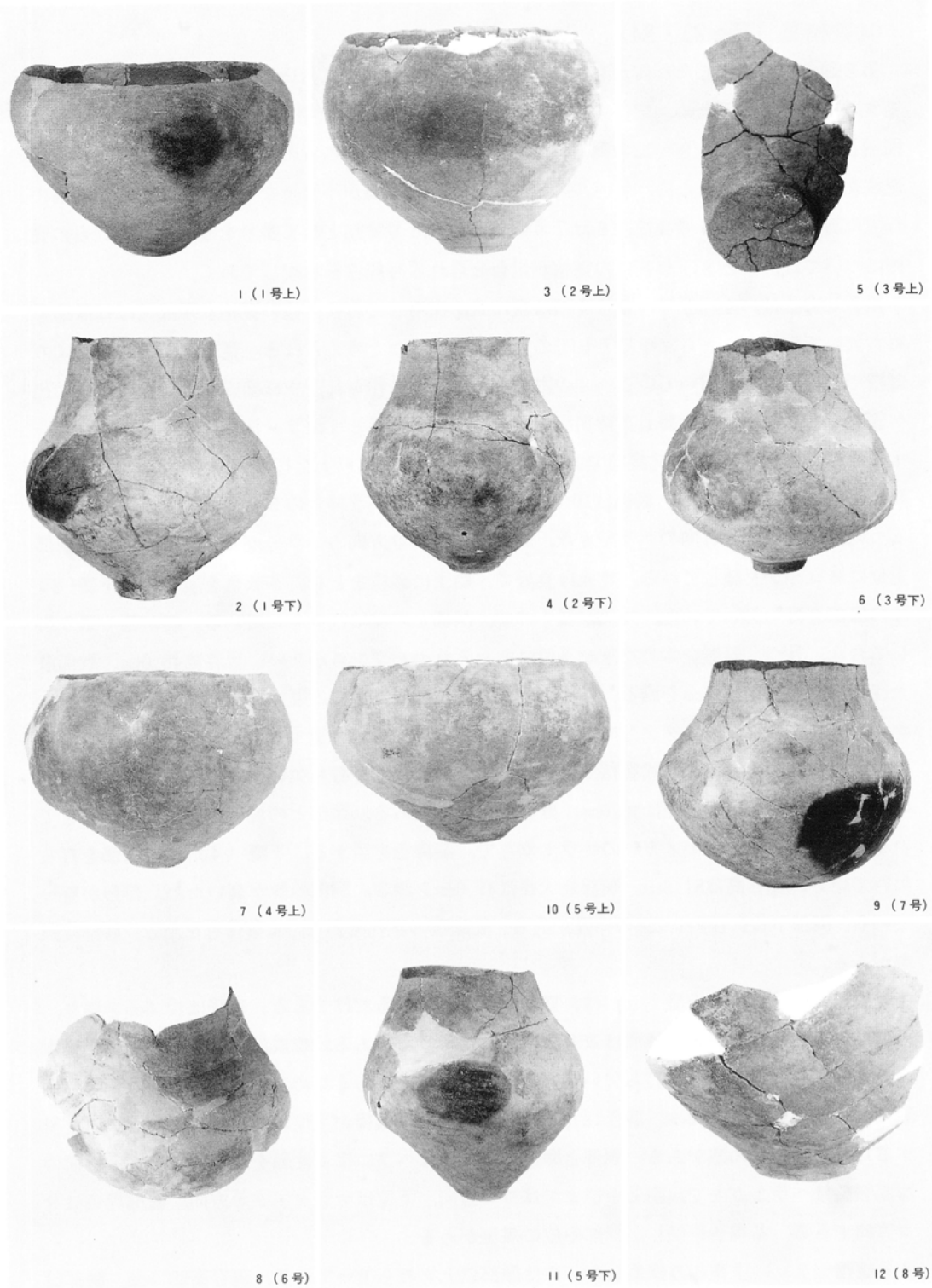


Fig.24　甕棺実測図②（縮尺1/8）



第1次調査出土甕棺

数字は実測図番号に一致する

⒁甕棺墓（Fig.23・24）

第２地点から出土した。何れも水道管埋設工事の立会調査において，掘り出された甕棺を採集する方法によったため，埋葬方法・埋葬角度・組合せ方法など不明な点が多い。特にFig.24に図示したように，８・９・12の甕棺については，その後の担当者の怠慢により，取り上げ番号を注記していなかったため，ラベルの紛失を招き，甕棺No.が不明となった。このため，著者の任意において，８は６号甕棺，９は７号甕棺，12は８号甕棺として番号を与えた。これらの甕棺については，７と８，９と12の甕棺が組合せられる可能性を示唆しておく。

組合せ方法は，１～３号・５号甕棺は覆口式を採用しており，他の甕棺も頸部又は口縁部を打ち欠いていることから，単棺としての埋葬は無かったと考えられる。甕棺は何れも伯玄式の甕棺で，壺形土器を用いている。８の彩文土器は丁寧に作られ，文様構成などは他の甕棺に比べ優美であることから埋葬者が特別な者であったことを示しており，注目に値する。

１号甕棺（１・２）　覆口式甕棺である。上甕（１）は頸部以上を打ち欠いている。現存高25.4cm，胴部最大径は41.0cm，底径は10.8cmを測る。肩部にヘラ描きの３重の弧文を連続させている。底部周辺はタテ方向のヘラミガキ，胴部上位はヨコ方向のヘラミガキを施す。内面は胴部上位にヨコハケを施している。焼成は良好で，胎土に砂粒を含む。茶灰色を呈する。下甕（２）は口縁部を打ち欠いている。頸部が長く伸び，胴部との境に段をもっている。肩が強く張り出しており，且つ，器形全体の比重が下位にあたるためバランスが悪い。現存高48.0cm，胴部最大径46.1cm，底径13.6cmを測る。外面のヘラミガキは肩部まではヨコ方向，胴部下位はタテ・ナナメ方向，底部周辺はタテ方向のナデ消しである。黄褐色を呈する。

２号甕棺（３・４）　覆口式甕棺である。上甕は頸部以上を打ち欠いている。腰が高い。胴部の現存高は35.7cm，最大径は46.0cm，底径は11.4cmである。頸部との境に１条の沈線を施している。外面はヨコ・ナナメ方向のヘラミガキで，茶褐色を呈する。下甕（４）は口縁部を打ち欠いている。現存高は51.8cm，胴部最大径は47.0cmを測る。胴部の腰が高いため，器形が整っている。胴部下位に径約1.2cmの穿孔がある。焼成後の穿孔である。淡茶褐色を呈し，肩部に黒斑がある。

３号甕棺（５・６）　上甕（５）は，底部が遺存しているだけである。底径は12.6cmを測り，円盤貼付状を呈している。外面はヨコ方向のヘラミガキである。焼成は良好で，茶褐色を呈する。下甕（６）は口縁部を打ち欠いている。器形に歪みがあるため，バランスが悪い。現存高52.8cm，胴部最大径52.8cm，底径12.3cmを測る。胴部最大径が下位にある。肩部がナデ肩を呈するため，下膨れの感がある。胴部と頸部との境にはヘラによる沈線を螺旋状に施す。外面の器面調整はヘラミガキで，胴部中位まではヨコ方向，下位はナナメ・タテ方向，底部周辺はヨコ方向である。茶褐色を呈し，胴部中位に黒斑がある。

４号甕棺（７）　上甕のみ採集した。７は頸部以上を打ち欠いており，現存高33.1cm，胴部最

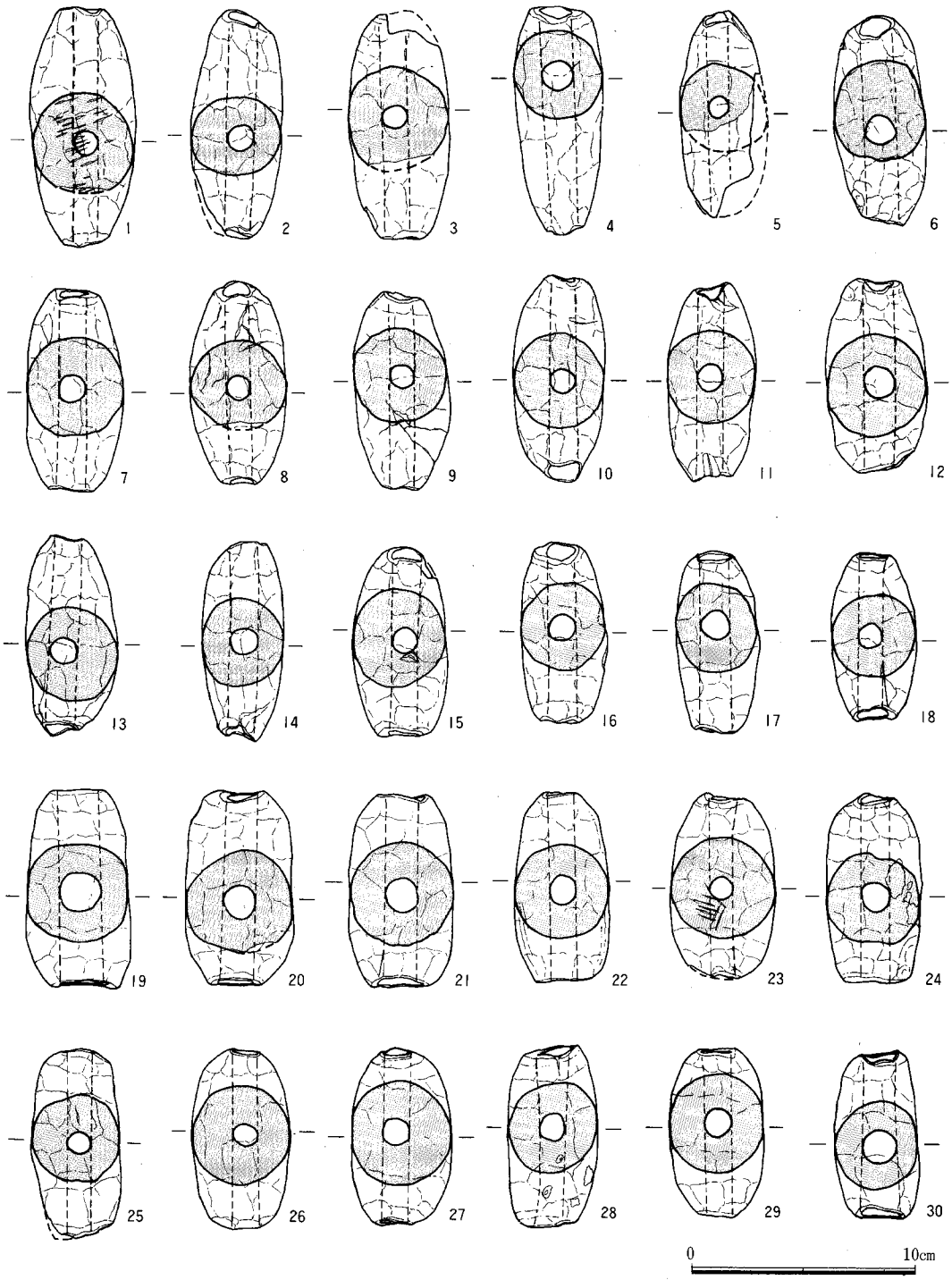


Fig.25　土錘実測図（縮尺1/3）

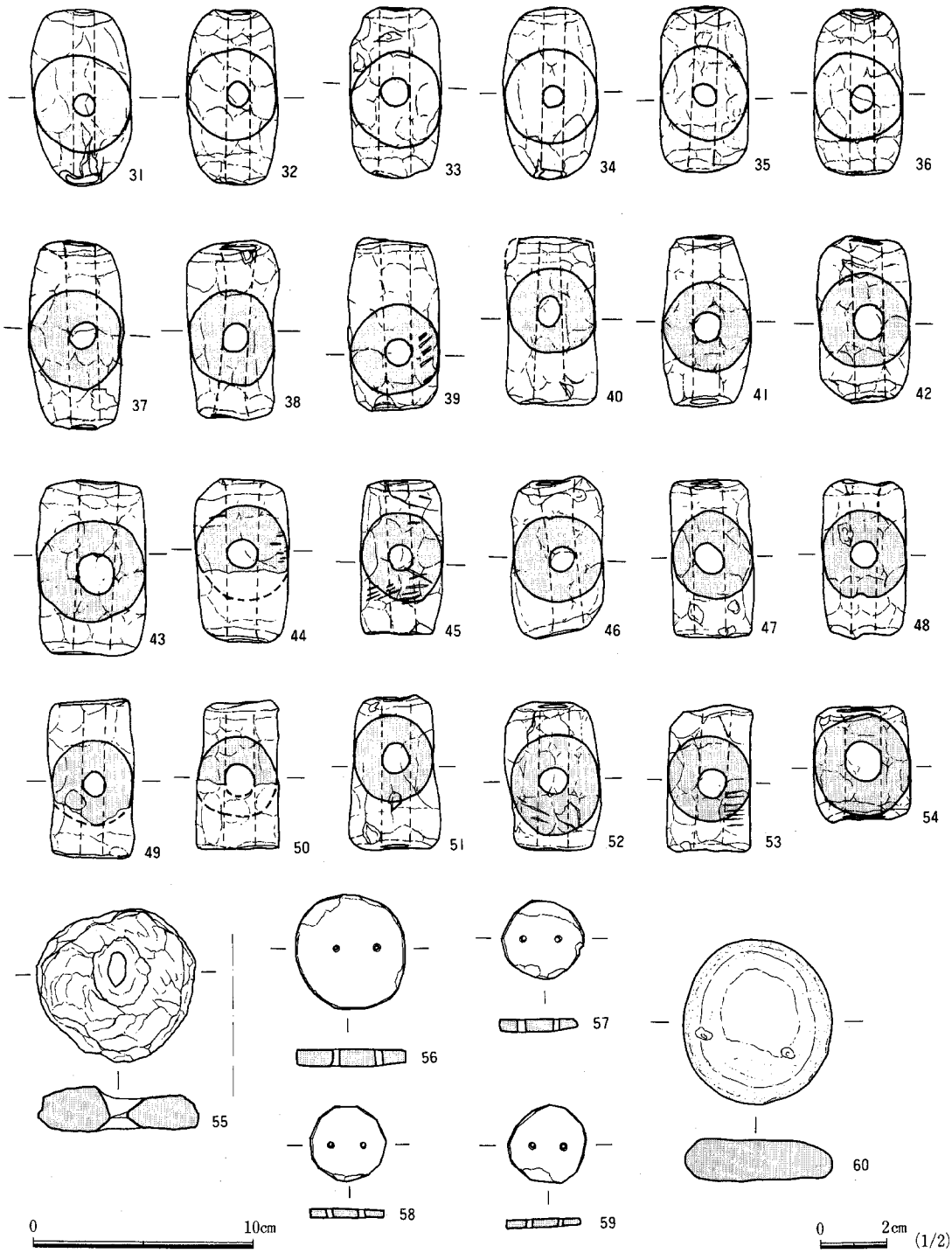
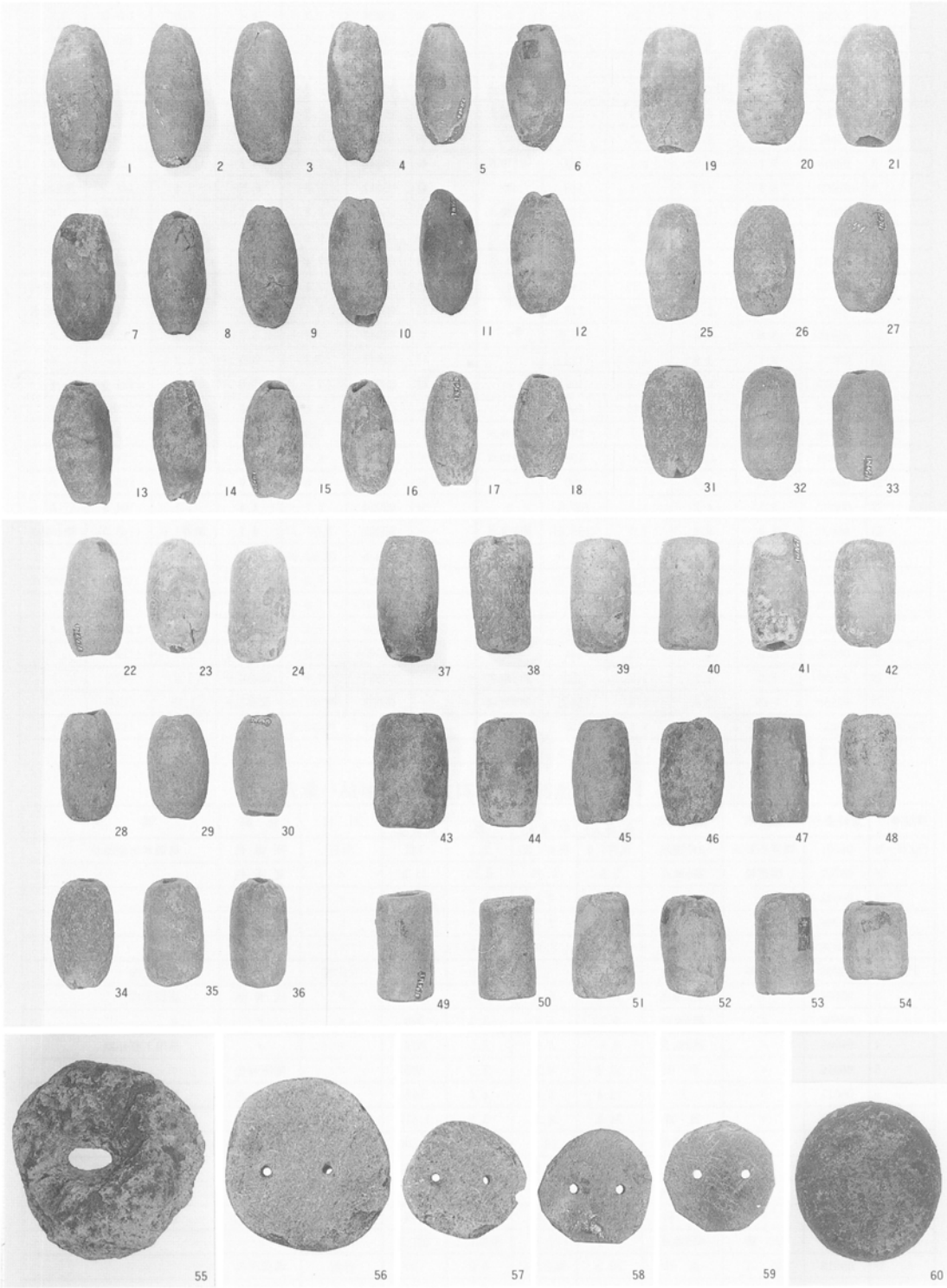


Fig.26　土錘・土製品・石製品実測図（縮尺1/3・1/2）



第１次調査出土土錘・土製品・石製品

数字は実測図番号に一致する

Tab. 3　今宿遺跡第１次調査出土土錘一覧表

挿図番号	登録番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	挿図番号	登録番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点
Fig.25−1	05001	10.7	4.8	1.1	250	第5地点	Fig.26−33	05033	7.3	4.3	1.1	163	第9地点
2	05002	10.2	4.1	1.25	(156)	〃	34	05034	7.9	4.4	1.0	159.5	〃
3	05003	10.1	4.0	1.0	199	〃	35	05035	7.6	4.1	1.2	153.5	〃
4	05004	10.3	4.1	1.3	151	第9地点	36	05036	7.7	4.1	1.2	148	〃
5	05005	9.2	現存3.5	0.9	(127)	第5地点	37	05037	8.7	4.4	1.25	164.5	〃
6	05006	9.3	4.2	1.3	133	第9地点	38	05038	8.2	4.3	1.2	153.5	〃
7	05007	9.1	4.3	1.2	178	〃	39	05039	7.9	4.2	1.2	(156)	第5地点
8	05008	9.1	4.3	1.1	(133)	第5地点	40	05040	7.7	4.2	1.4	158	〃
9	05009	8.9	4.2	1.1	149	〃	41	05041	7.8	4.15	1.4	142.5	第9地点
10	05010	9.2	4.2	1.15	155	第9地点	42	05042	7.8	4.2	1.5	144.5	〃
11	05011	8.8	3.9	1.35	135	〃	43	05043	8.0	5.0	1.7	212	〃
12	05012	8.8	4.6	1.4	166	〃	44	05044	7.4	4.3	1.4	(139)	〃
13	05013	9.1	4.15	1.25	146	〃	45	05045	7.1	3.8	1.2	124	第5地点
14	05014	9.1	3.7	1.25	119	〃	46	05046	7.1	4.3	1.0	148	第9地点
15	05015	8.5	4.2	1.1	149.5	〃	47	05047	7.2	3.7	1.2	126	〃
16	05016	8.1	3.9	1.2	113	〃	48	05048	7.4	3.9	1.2	125	〃
17	05017	8.25	3.75	1.3	109	〃	49	05049	7.3	3.9	1.2	125.5	〃
18	05018	7.3	3.8	1.15	109	〃	50	05050	6.8	3.8	1.2	(118)	〃
19	05019	8.8	4.7	1.7	191	第5地点	51	05051	7.0	4.25	1.9	134	〃
20	05020	8.85	4.85	1.5	198	第9地点	52	05052	6.8	4.4	1.2	144	〃
21	05021	8.8	4.7	1.5	250	〃	53	05053	6.6	3.9	1.3	126.5	〃
22	05022	8.5	4.2	1.3	167.5	〃	54	05054	5.7	4.4	1.7	104.5	〃
23	05023	8.4	4.8	1.0	(165.5)	第5地点	—	05055	現存7.5	4.7	現存1.0	(142.5)	第5地点
24	05024	8.5	4.4	1.2	158.5	〃	—	05056	現存2.9	3.6	—	(52.5)	〃
25	05025	8.4	3.9	1.0	(127.5)	第9地点	—	05057	7.8	4.3	1.4	(93.5)	第9地点
26	05026	8.1	4.5	1.0	158	〃	—	05058	7.6	4.3	1.1	(146)	〃
27	05027	8.0	4.5	1.2	174	〃	—	05059	7.3	現存4.2	1.2	(154.5)	〃
28	05028	8.0	4.1	1.2	144	〃	—	05060	7.2	現存3.1	1.4	(119.5)	〃
29	05029	7.6	4.3	1.2	150	第5地点	—	05061	7.0	現存4.0	1.3	(127)	〃
30	05030	7.55	3.8	1.5	114.5	第9地点	—	05062	現存7.0	現存3.9	1.15	(127)	〃
Fig.26−31	05031	8.1	4.5	1.1	170	〃	—	05063	現存6.2	4.2	1.0	(148)	〃
32	05032	8.0	4.2	1.15	157.5	〃							

Tab. 4　今宿遺跡第１次調査出土石製品一覧表

挿図番号	登録番号	種　類	出土地点	大きさ(cm)				石　材	色　調	備　考
				長(最大)	幅(最大)	厚	重量(g)			
Fig.26−55	06001	環状石製品	2号甕棺	現存7.0	現存7.25	2.1	142	滑石	灰緑色	紡錘車未製品か
56	06002	模造鏡	第5地点	3.5	3.35	0.55	11.5	〃	青灰色	
57	06003	〃	〃	2.4	2.5	0.4	5	〃	〃	
58	06004	〃	第4地点	2.2	2.4	0.3	3	〃	茶　色	
59	06005	〃	第10地点	2.35	2.35	0.4	3	〃	〃	
Fig.27-1	06006	石　斧	第2地点	現存17.8	7.3	4.6	812	玄武岩	暗灰青色	第II工程
2	06007	〃	第2地点	18.2	6.4	5.2	1,030	〃	灰青色	第III工程
3	06608	〃	第5地点	9.2	5.9	3.5	328	〃	〃	〃
4	06009	〃	第2地点	8.9	5.9	3.5	324	〃	〃	第III工程初期
5	06010	〃	不　明	12.2	6.3	3.3	495	〃	暗灰青色	〃
6	06011	〃	〃	13.4	5.4	4.4	510	〃	暗灰色	第III工程終了
7	06012	〃	表　採	24.5	8.1	5.5	1,512	〃	青灰色	第II工程中期
Fig.28-8	06013	〃	第6地点	16.5	10.7	6.05	1,500	〃	暗灰青色	第I工程～第II工程
9	06014	〃	不　明	15.2	7.8	4.8	935	〃	〃	第III工程の終末
10	06015	〃	第8地点	7.8	7.6	4.05	465	〃	〃	第III工程終末
11	06016	〃	不　明	9.2	5.9	3.5	489	〃	灰青色	第III工程後半
12	06017	石　錘	第8地点	10.2	7.4	現存1.3	161.5	〃	〃	
13	06018	砥　石	表　採	10.3	現存8.1	5.5	790	砂岩	淡黄灰色	
14	06019	〃	第2地点	9.0	10.1	4.5	450	〃	淡茶灰色	
15	06020	〃	表　採	6.0	4.6	4.2	145	〃	暗茶灰色	

大径39.5cm，底径10.5cmを測る。胴部は球体に近い丸味をもっている。胴部と頸部の境に1状の圏線を施す。外面はナナメ・タテ方向のヘラミガキ調整である。茶褐色を呈する。

5号甕棺（10・11）　覆口式甕棺である。上甕（10）は頸部以上を打ち欠いている。現存高34.9cm，胴部最大径52.6cm，底径14.1cmを測る。肩部は強く貼っている。外面の調整はヘラミガキで，上位がヨコ，下位はタテ方向である。内面の調整は，胴部上位が丁寧なヨコナデ仕上げである。茶褐色を呈する。下甕（11）は口縁部を打ち欠いている。現存高は61.0cm，胴部最大径59.2cm，底径13.9cmを測る。頸部は短く，胴部との境に沈線で1条の圏線を巡らしている。胴部の腰が高いため，不安定な器形である。また，歪みが著しい。調整は外面がヨコ方向のヘラミガキ，内面は頸部の上位にヨコ方向のナデを施す。最大胴径の位置に，径1.9cmの穿孔がある。焼成後に外側から穿孔している。茶褐色を呈する。

6号甕棺（8）　彩文土器である。図上で復原した。頸部を打ち欠いているので，覆口式甕棺であろう。現存高は31.3cm，胴部最大径は36.2cmを測る。胴部は球体で，頸部は短く，内傾する。胴部と頸部の境に沈線を巡らしている。彩文は風化しているが，ベンガラを用いている。彩文は頸部と胴部の境に5本，胴部中に3本の彩文の圏線を施し，その間には6重の，鋸歯文を連続させる。又，頸部には，タテ方向に7～8本単位の彩文を等間隔に施す。外面の調整はヨコ方向のヘラミガキである。暗茶褐色を呈する。

7号甕棺（9）　組合せは覆口式と考えられる。下甕で，口縁部を打ち欠いている。現存高50.0cm，胴部最大径は56.2cm，底径11.4cmを測る。底部は円盤貼付状である。胴部の肩は強く張っており，最大胴径が低い位置にあるため安定感がある。器面調整は，胴部外面がナナメ・ヨコ方向のヘラミガキである。焼成は良好で，茶褐色を呈する。

8号甕棺（12）　胴部の中位以上を欠損しており，組合せ方法は不明。7号甕棺の上甕かもしれない。現存高は29.5cm，最大径56.6cm，底径14.2cmを測る。胴部は球体を呈し，底部は円盤貼付状である。外面の器面調整はタテ・ヨコ方向のヘラミガキである。茶褐色を呈する。

(15)　土製品（Fig.25・26）

土錘（Fig.25－1～Fig.26－54）　第5地点と第9地点の2カ所に集中的に出土している。合計63個である。管状土錘である。長さは最大10.7cm，最小5.7cmを測る。最大径は4.85～3.6cm，孔径は1.7～0.9cmを測る。両端がすぼまっているタイプと，円柱状のタイプの2種類に分類できる。色調は，暗茶灰色～茶褐色を呈する。胎土に砂粒を少し含み，焼成は良好である。円盤状土製品(60)。長さ2.5cm，最大幅4.55cm，厚さ1.3cmを測る。中央部に凹みがある。用途は不明である。

⑯ 石製品（Fig.26～28）

環状石製品（Fig.26－55）　2号甕棺の下甕より出土している。紡錘車の未製品と考えられ，上半部と表面の一部欠損している。滑石製で，現存の最大径7.25cm，厚さ2.1cm，孔径1.6cm，重量142gを測る。灰緑色を呈する。

石錘（Fig.28－12）12は玄武岩の偏平な剝片を加工したもので，最大長10.2cm，厚さ1.3cmを測る。四方に紐懸りの抉入部を設けている。

模造鏡（Fig.26－56～59）　56・57は第5地点，58は第4地点，59は第10地点で出土している。56は径3.5cm，他は2.2cm～2.4cmを測る。厚さは0.3cm～0.55cmを測る。いずれも2ケ所の穿孔がある。表面は丁寧なケズリ仕上げで，56・57は青灰色，58・59は茶灰色である。滑石製である。

石斧（Fig.27・28－1～11）　何れも玄武岩製の石斧未製品である。1・2・4が第2地点，3が第5地点，8が第6地点，10が第8地点，他は不明である。これらの石斧の製作段階については中山平次郎博士が考えられた製作工程に従って記述する。1は長さ17.8cmを測る。基部は未調整で，粗割の状態を残しているものと考えられる。刃部は丸く丁寧に整形している。打裂による全体の成形は終了しているが，敲打痕は見当らない。厚みは最大で4.6cmを測るが，全体的に薄手の作りである。第II工程である。2は全長18.2cm，厚さは5.2cmを測る。厚みのある石斧で，断面形は不製円形である。器形の打裂整形は終了しており，両側辺から敲打作業が行われているが，両面の敲打は少ない。第III工程である。3は基部側を欠いており，現存長9.2cm，厚さ3.5cmを測る。小型の石斧で，身幅が狭い。断面形は不整楕円形である。器形の成形は丁寧で，刃部は丸く整形している。両側辺の打裂痕を敲打調整している。両面の敲打作業は，完了しているが，片面はほぼ全体に敲打を行い，打裂痕を消している。第III工程である。4は，刃部を欠損している。現存長は8.9cm，厚さ3.5cmを測る。完成時の断面形は偏平な楕円形になると考えられる。打裂整形は丁寧で，基部縁辺及び側辺部において敲打が始められている。小型の石斧で，第III工程初期段階である。5は基部を欠損している。現存長は12.2cm，厚さ3.3cmを測る。完成時の断面形は偏平な楕円形と考えられ，大きさ，形状は1の石斧に相似するものである。全体に大きな剝離面を残しているが，縁辺の打裂整形は丁寧である。刃部は丸く整形する。敲打作業は片方の側辺から始められており，両面の敲打によって，打裂痕を一部調整している。第III工程の初期段階である。6は刃部を欠損している。現存長13.4cm，厚さは4.4cmを測る。2と同じく完成時は，断面形が不製円形の厚みをもつ石斧となるであろう。2に比べ，身幅が狭いが，復原の長さは18cm前後であろう。両面の打裂作業は大きな剝離面を残しているが，両側辺は細かい打裂調整である。基部端部は未調整である。側辺の一部に敲打痕がある。第III工程を終了した段階である。7は長さ24.5cm，最大幅8.1cmを測る。柱状の原材から最大の厚さ約5.5cmほどの板状材を粗割して作り出したもので，片方の側面には自然面を残している。打裂成形は粗く，大きな剝離面を残しているが，一方の側辺は，細かい打製調整を行っている。刃

部，基部の整形作業に至っていない。完成すれば断面形が偏平楕円形で，全長は22～23cm程度の長さになるであろう。第II工程の中間段階である。8は一部を欠損しており，長さ16.5cm，最大幅10.7cmを測る。風化した円礫から横長の剝片を作り，素材として利用しているもので，側辺及び片面に自然面（風化面）を残している。片面には打痕が残っており，両側辺から粗割を加える。片方の側辺には一部打裂がみられるが，成形するに至っていない。基部，刃部ともに不明である。第I工程から第II工程へ移行する段階である。長さ18cm前後の石斧の製作が可能である。9の長さは15.2cm，厚さ4.8cmを測る。1・2と同じの身幅・厚さをもっていることから，当初は，1・2と同様に18cm前後の長さの石斧を作る予定が，刃部を欠損したために，刃部の再加工を行っているものと考えられる。縁辺の整形は終了しており，両方の側辺と両面に敲打作業が行われているが，片方の側辺の敲打はわずかである。刃部の整形は完了していない。第III工程の終わりの段階である。10は基部・刃部共に欠損している。身幅は7.6cm，厚さ4.05cmを測ることから，長さ18cm前後の石斧になるものと考えられる。片面に大きな剝離面を残しているが，側辺の細かい打裂調整は済んでいる。両側辺と片面のみ敲打作業が行われている。敲打段階で破損したものであろう。第III工程終末段階。11は刃部側の大部分を欠損している。基部端は，粗割面を残したままである。片面に大きな剝離面を残すものの，縁辺の細かい打裂調整は済んでいる。敲打作業は片方の側辺を残して行われている。第III工程の後半段階である。

以上の他，風化礫が2点出土しており，1点は長さ約24cm前後を測り，碗状の大形剝片である。

砥石（Fig.28－13～15）　何れも砂岩製であるが，13・15は木目の細かい砂岩を用いている。14は前後の端部を欠損しているため長さは不明。幅は10.1cmを測る。偏平な砥石で，両側・側面を面取りしている。砥面は両側面だけである。粗い粒子の砂岩である。13は一部を欠くが，幅は10.3cmを測る。全体を不整の方形に面取りしており，砥面としては両面，及び両側面の4面である。灰白色の砂岩である。15は一部を欠損している。最大長6.0cmを測る。全体を面取り整形しているが，片方の側面，片方の小口面を含んだ3面を砥面としている。一面には玉を磨いた痕跡を残している。茶色の砂岩である。

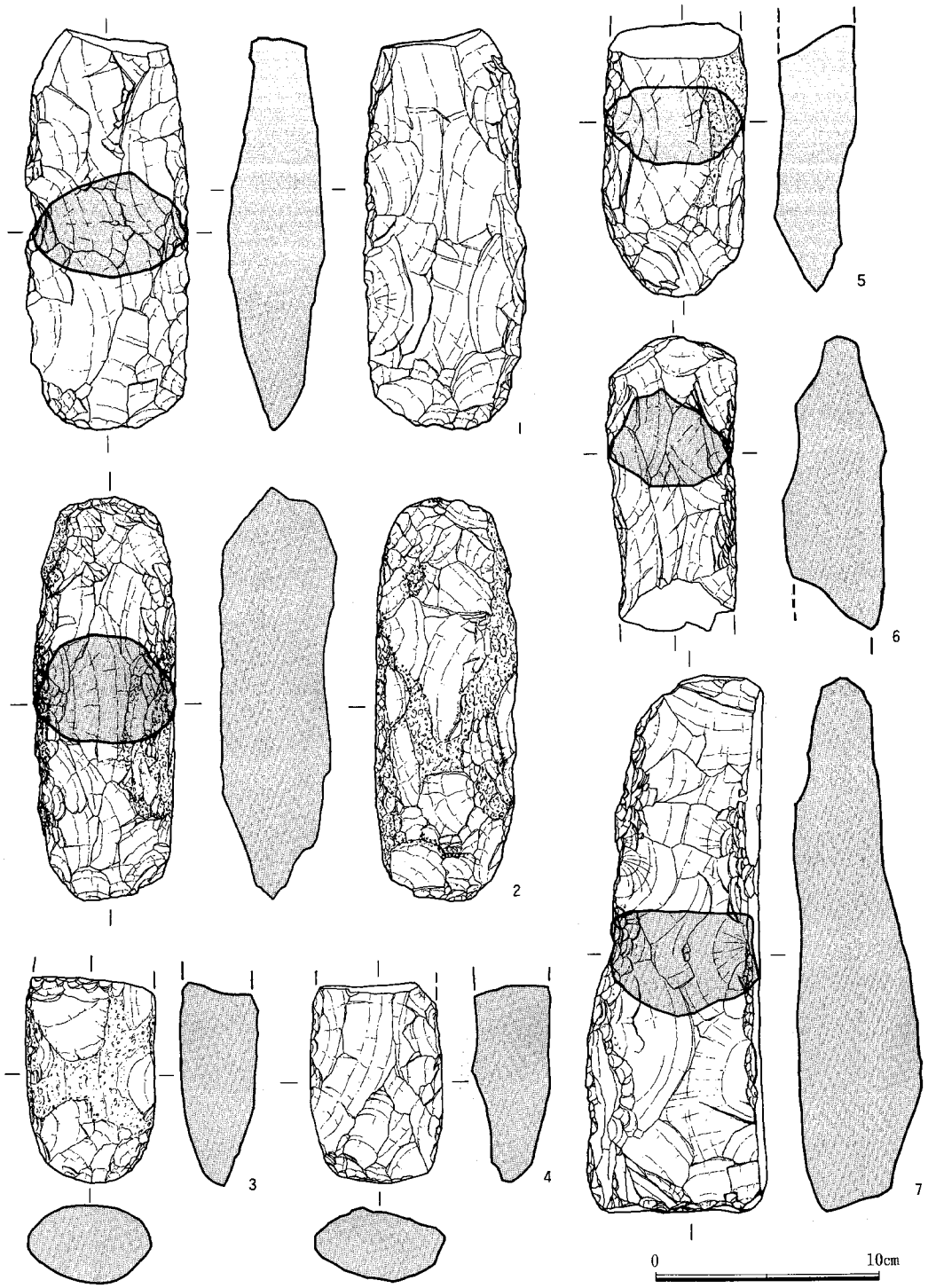


Fig.27　石製品実測図①（縮尺1/3）

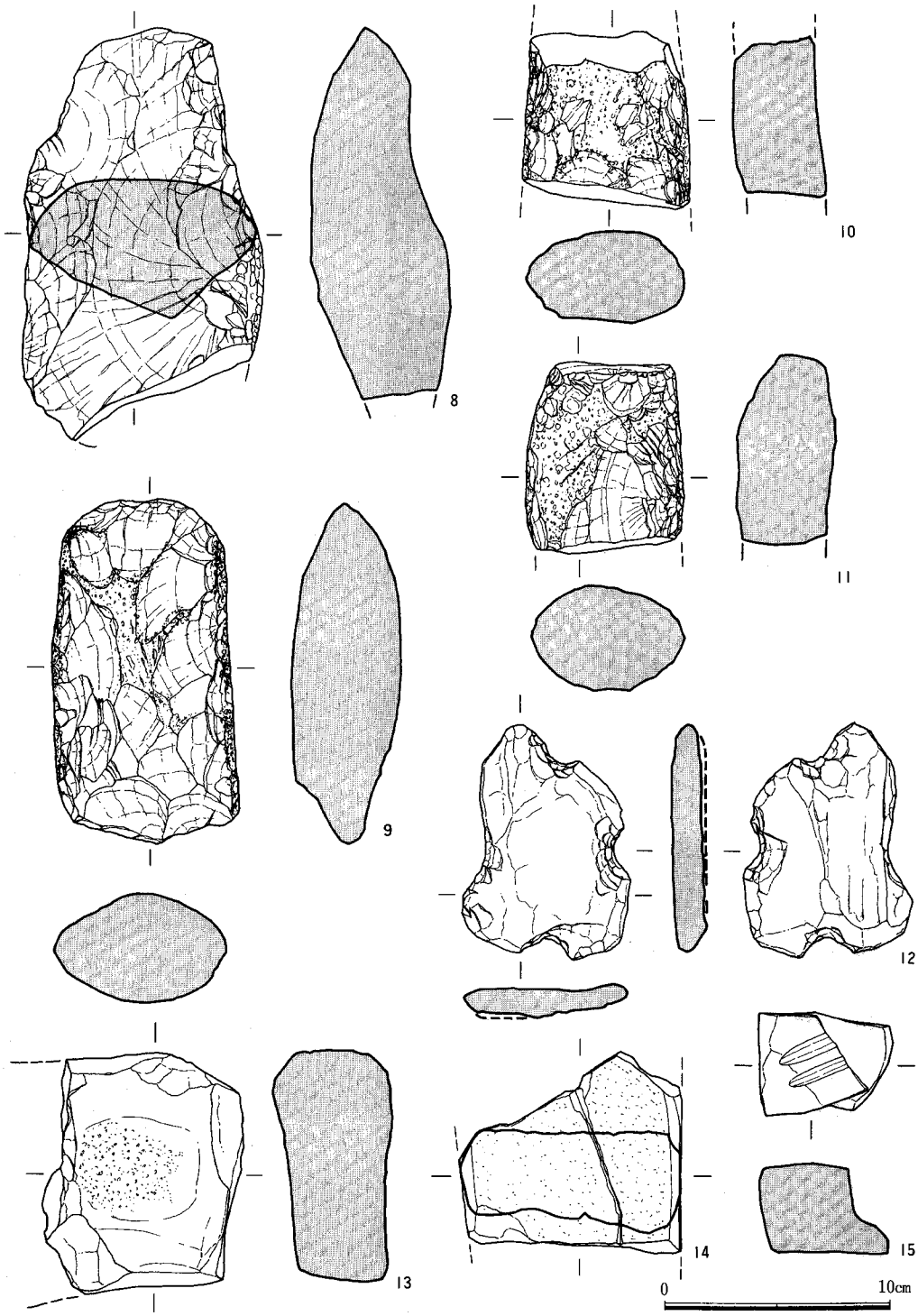
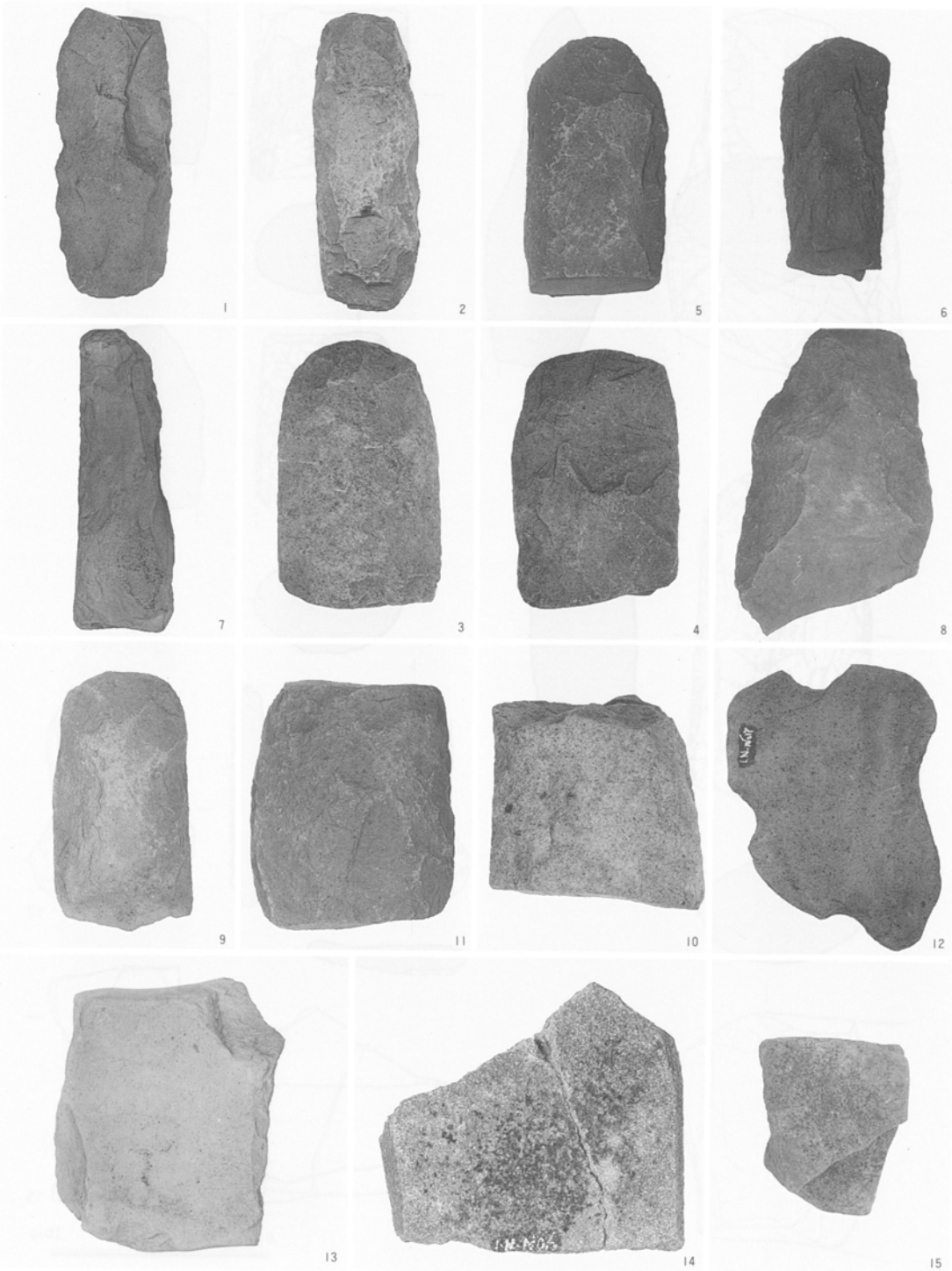


Fig.28　石製品実測図②（縮尺1/3）



第１次調査出土の石製品

数字は実測図番号に一致する

〈付　編〉

今宿・今山遺跡及び周辺遺跡の表採資料

玄洋公民館主事　　大 内　　士 郎

1．はじめに

多くの遺跡が点在する今宿・今山地域では，それを裏付けるように，数多くの発掘調査が行われ，多くの採集遺物が存在する。ここに挙げたものはそのほんの一例である。出土地点・出土状況が不明なものもあるが，発掘調査の成果を補足するものとしてここに報告する。

2．今山遺跡の遺物

今山は，福岡県により行われた玄武岩採掘事業により北側全部と，東側の大部分，西側の半分以上は破壊され，遺構・遺物は検出されない。南側斜面と西側斜面・東側斜面の一部は，神社用地や民有地として管理されていたので，比較的保存状態が良く，太型蛤刃石斧の未製品を中心に，現在でも遺物が散見される。南側山麓の平坦部では，黒曜石片や弥生土器片，製塩土器なども見られるが，住居跡らしきものは確認できない。

(1)　弥生式土器・器台（Fig.31－6）

南斜面B区中腹の雑木林で採集。口径13.6cm，器高20.9cm，底径14.2cmを測る。口縁部は強く外反し，脚裾部は開いている。外面はナデ調整である。

(2)　石製品

西側斜面をA区，南側斜面をB区，東側斜面をC区として，採集場所を大まかに区別する。今山は，太型蛤刃石斧の製造所として知られその未製品，失敗作が多く検出されているが，それ意外に，玄武岩製の不定型の石器類の未製品も多く見られる。

①A区採集遺物

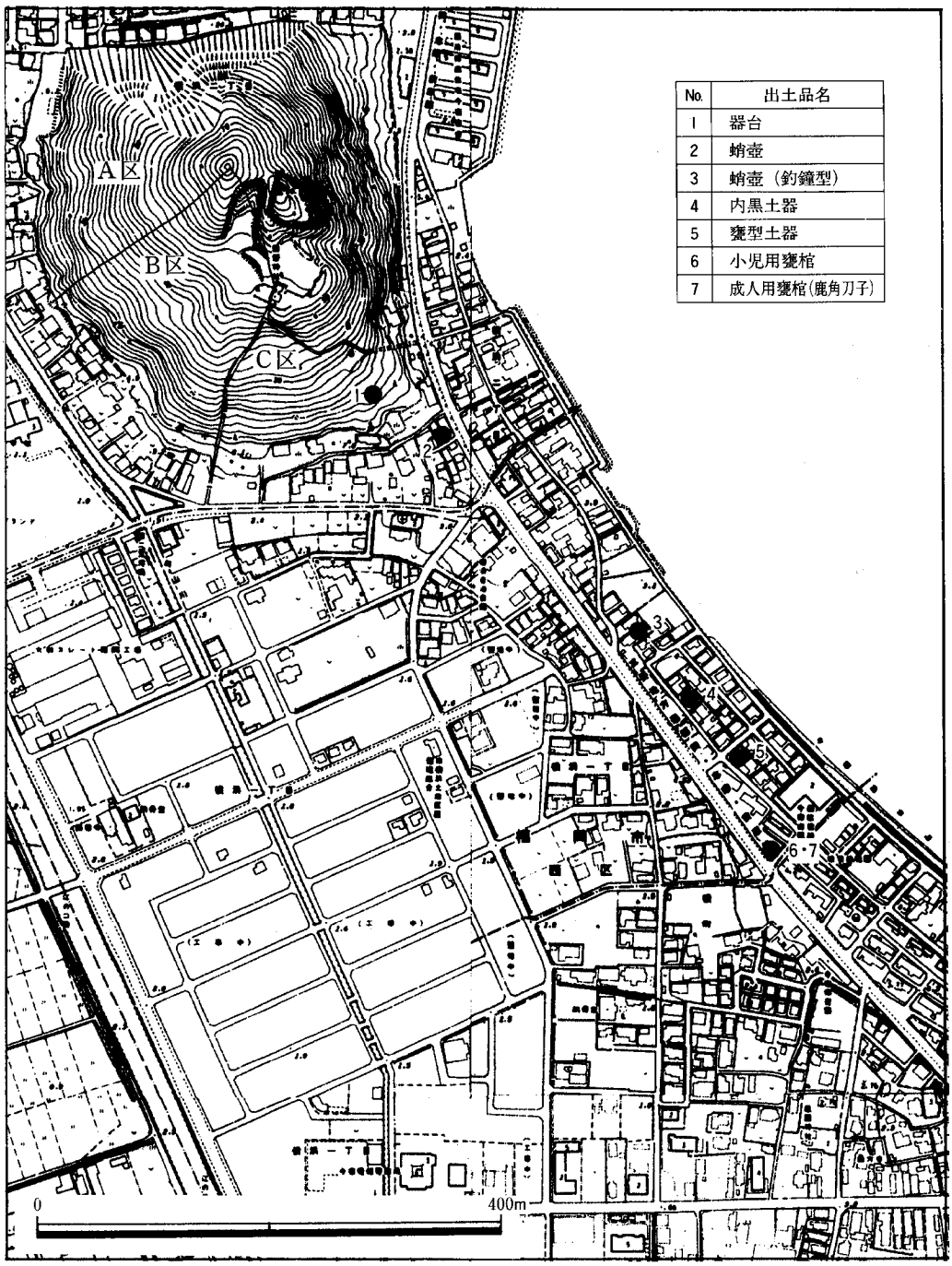
石鎌（15）　現存長19.6cm。未成品である。かって，今山出土といわれる石鎌の完成品を見たことがあるが，この未成品よりは，大型で，幅広だと記憶している。

小型石斧（16・17）　16は全長11.5cmを計る。未成品である。西側斜面中腹の雑木林で採集。この大きさでは，果たして完成品となり得るかは疑問がある。17は現存長7.7cm，最大幅7.0cm。小型石斧の刃部で未成品である。

偏平石器（18）　小型品で，全長12.1cm，最大厚2.0cmを計る。未成品で，断面形は偏平な楕円形である。一見，石庖丁の未成品とも考えられるが，完成時の形状及び用途は不明。

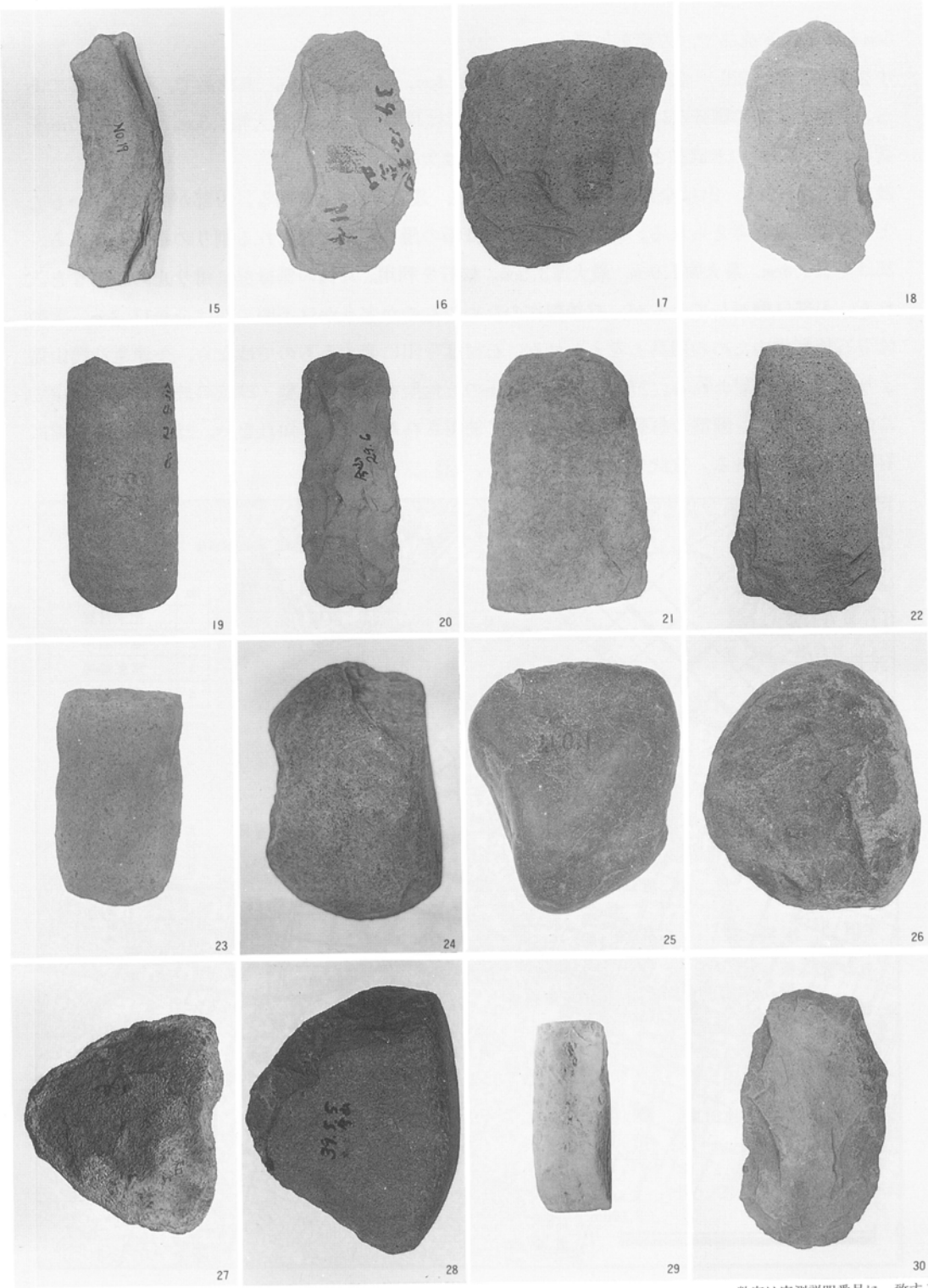
②B区採集遺物

太型蛤刃石斧（19～21）　19は現存長16.3cm，最大厚5.0cm，最大幅7.3cmを測る。基端部は欠損しているが，刃部まで鼓打の完了した完成品。20は全長24.4cm，最大幅9.4cm，最大厚5.0cmを測る。未成品で断面形は不整円形の厚みをもつ。21は現存長10.5cm，最大幅6.7cm，最大厚3.



No.	出土品名
1	器台
2	蛸壺
3	蛸壺（釣鐘型）
4	内黒土器
5	甕型土器
6	小児用甕棺
7	成人用甕棺(鹿角刀子)

Fig.29　今宿・今山遺跡表採遺物出土位置図（縮尺1/6,000）



数字は実測説明番号に一致する

今山遺跡採集の石製品

5cmを測る。未成品で，刃部を欠損。

小型石斧（22・23）　22は全長9.9cm，刃部幅5.4cm，最大厚2.4cm。未成品で，転石利用である。刃部と片側の側縁部に打撃痕が見られる。23は現存長6.2cm，最大幅3.5cm，最大厚1.7cmを測る。片刃石斧の未成品と見られるが，基端部は欠損。

鼓打具（24～28）　24は全長9.1cm，最大幅6.0cm，最大厚2.8cmを測る。刃部が磨滅していることから鼓打具と考えられる。側縁部の片側には指の滑り止めと見られる削りの細工跡がある。25は全長9.4cm，最大幅7.9cm，最大厚3.5cm。転石を利用。片側の側縁部に滑り止めの削りを入れる。刃部は磨滅しているが，石斧製作のためのものかどうかは不明。26は全長11.2cm。太型蛤刃石斧製作のための用具と考えられる。石材は今山に産するものではなく，今津毘沙門山麓より運ばれたと思われる。27は一辺が約11cmの三角型を呈し，丸型・球状の鼓打具が多い中で，この形は珍しい。細部の打裂調整用具として使用されたものかも知れない。28は転石の一端に打裂痕が認められる。玄武岩を利用している。

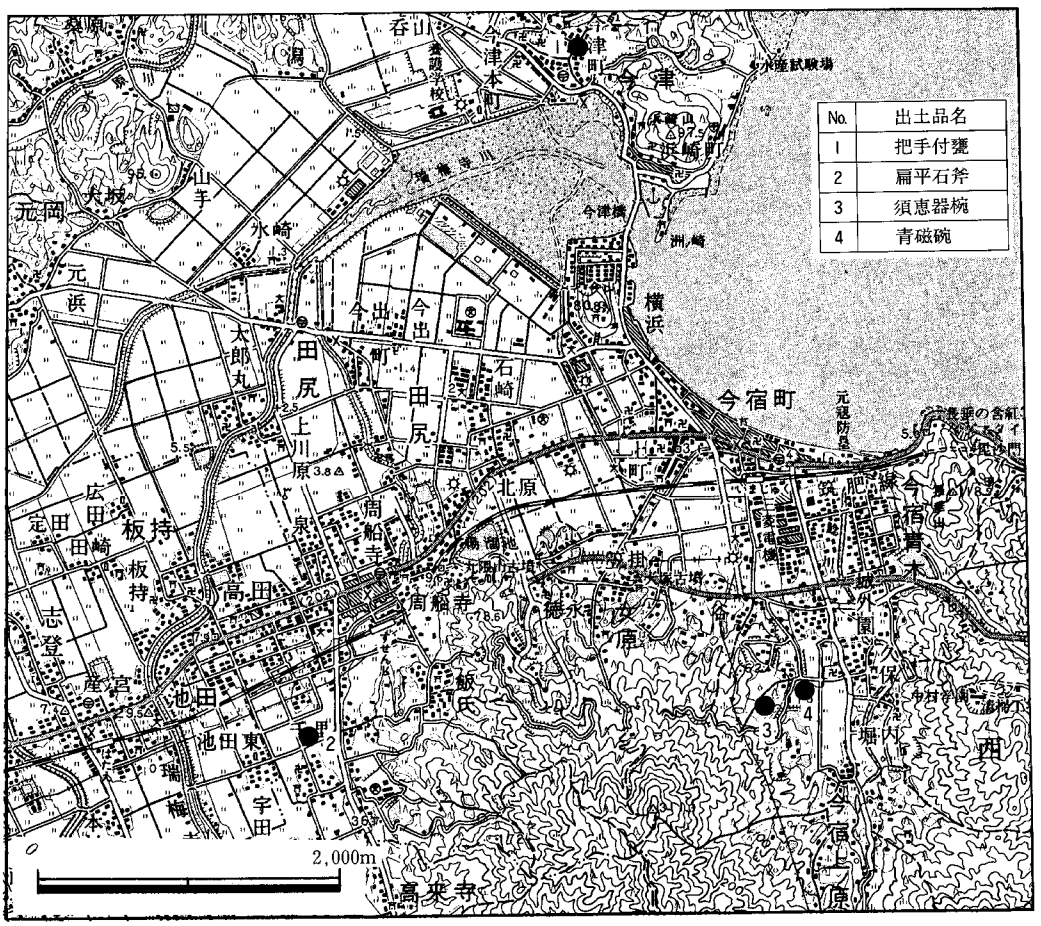


Fig.30　今宿周辺遺跡表採遺物出土位置図（縮尺1/50,000）

③C区採集品

片刃石斧（29）　全長9.1cm，刃部幅3.0cm，最大厚2.0cm。熊野神社参道入口付近で採集。

太型蛤刃石斧（30）　全長21.8cm，最大幅12.7cm，最大厚7.2cm。未成品で，今山南東平坦部出土。

3．今宿遺跡（旧墓地跡）採集遺物

昭和33年より，今宿免当原墓地の改葬が行われ，それに伴って数々の遺物が出土した。考古学的な発掘調査を伴わない墓地改葬であったため，ほとんどの遺物は破損，散逸してしまったが，かろうじて数点は採集保存できた。

(1)　出土遺物

内黒土器（Fig.31－2）　完形品である。口径15.4cm，器高7.5cmを測る。外面はヨコナデ仕上げで，内面にいぶしを施す。外面は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

蛸壺（Fig.31－4・5）　4は昭和35年出土。完形品である。高さ11.3cm，口径5.8cm，最大胴径7.2cmを測る。下膨らみの体部で，底部は丸底である。内外面はナデ仕上げである。口縁部直下に焼成前の穿孔がある。穿孔は外から斜め上に抜けており，最大径は1.1cmを測る。

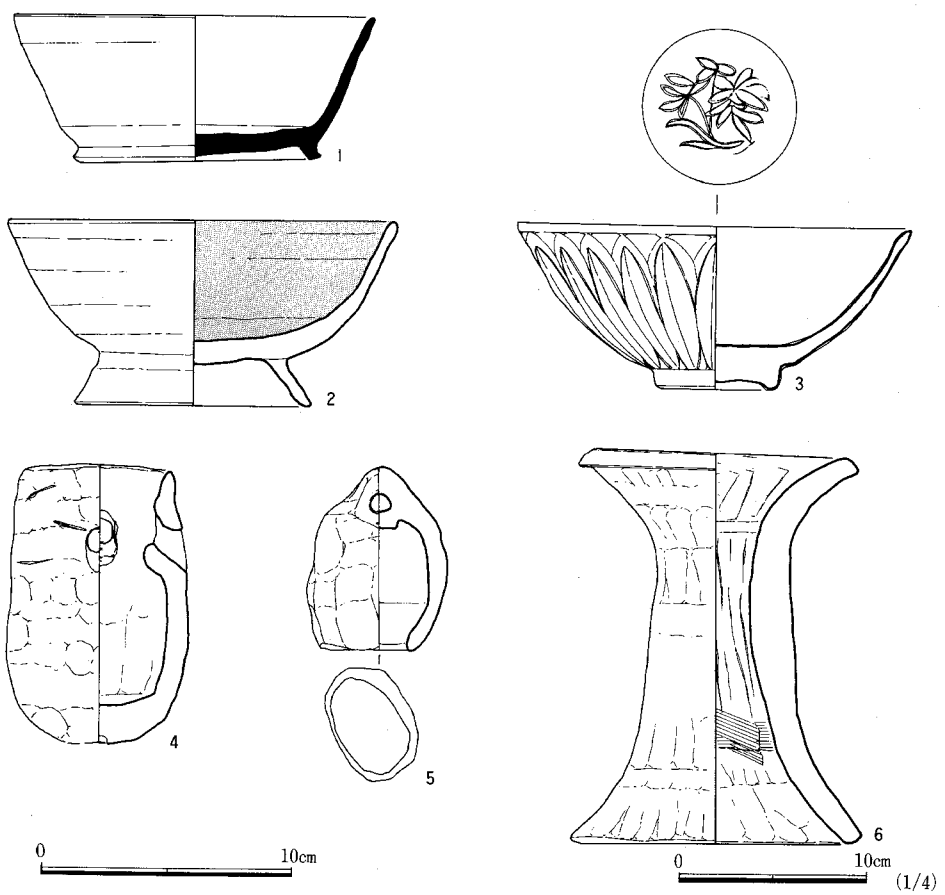


Fig.31　今宿周辺表採遺物実測図①（縮尺1/3・1/4）

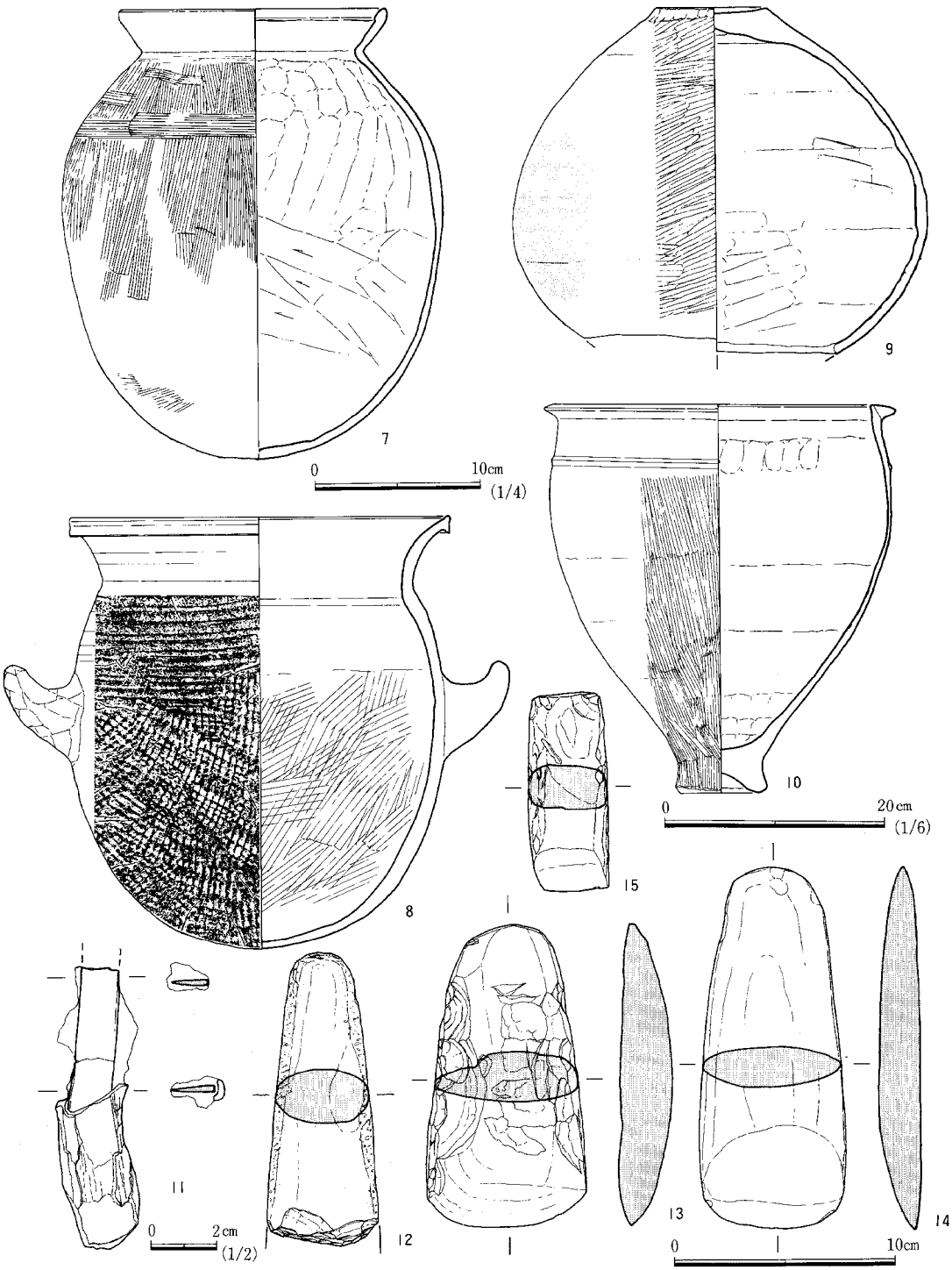


Fig.32　今宿周辺表採遺物実測図②（縮尺1/2・1/3・1/4・1/6）

5は釣鐘形のタコ壺で，玄界灘沿岸では珍しく，市内では志賀島弥五郎下から1点出土している。完形品で，器高は7.2cm，口径は3.3cm，体部は丸みをもち，最大胴径は5.6cmである。底部につまみが付いており，縄掛けの穿孔がある。径は0.9cmを測る。

甕型土器(Fig.32－7)　墓地改葬当時，市会議員であった故板屋猛氏が採集。完形品で，口径16cm，器高27.6cmを測り，丸底である。布留式土器を真似ている。外面は頸部より下位にタテ方向ハケ目を，内面は上部がナデ調整，下部はナナメ方向のヘラケズリを施す。

小児用甕棺(Fig.32－9・10)　墓地改葬時に出土。合口式の甕棺で，上甕(9)は壺形土器で，口縁部を打ち欠いている。現存高31.7cm，胴部最大径38.1cm，底径9.5cmを測る。外面はヨコ・ナナメ方向にヘラミガキを施す。下甕(10)は口縁部は逆L字型，底部は上げ底で，現存高35.8cm，口径28.9cm，底径7.4cmを測る。体部上位に1条の突帯を有する。ヨコ・タテのハケ目を施す。淡茶褐色を呈する。

成人用甕棺　市営住宅造成時に出土。単棺で，大型の甕を用いている。外面の胴部に帯状の突帯を施し，内面はベンガラを塗布している。内部より鹿角装刀子が出土している。

鹿角装刀子(Fig.32－11)　現存長8.6cm，幅2.4cm，厚み0.2cmを測る。刃部は欠損しているが，刃部の一部が遺存しており，刃幅1.3cmを測る。柄の部分に鹿角質を残す。

4．今宿上ノ原・相原遺跡出土の遺物

乳棒状石斧(Fig.32－12)　完形品で，全長13.4cm，刃部幅5.2cm，最大厚2.4cmを測る。細かい打撃痕を加え，刃部の成形を行っている。刃部は丸みをもち，幅は4.9cmを測る。

須恵器椀(Fig.31－1)　ブドウ畑の開墾中出土したものとのこと。詳細な出土場所は不明。完形品で，口径14.5cm，器高6cm，高台径9.2cmを測る。

青磁碗(Fig.31－3)　水路掘削中に出土。どのような遺構に伴うものかは不明。相原では，昭和30年代にブドウ畑の開墾が始まり，その後，廃寺の跡が数個所あったとの話もある。龍泉窯系である。完形品で，口径16.2cm，器高6.4cm，底径4.5cmを測る。外面は鎬蓮弁文，見込みには蓮華文を施す。

5．千里遺跡出土の遺物

偏平石斧(Fig.32－13・14)　13は全長16.6cm，刃部幅6.5cm，最大厚1.9cmを測る。玄武岩製。昭和40年頃，西区千里遺跡で，屋根瓦用粘土を採掘中に出土。縄文時代に属する石斧とみられることから，今山の偏平石斧未成品との関係が考えられる。14は全長14cm，刃部幅7.4cm，厚さ2.2cmを測る。13と共に出土。石材は今津毘沙門山北側に多く見られる変成岩である。

6．今津貝塚出土の遺物

把手付き甕(Fig.32－8)　昭和30年頃，今津貝塚周辺より出土したものとのこと。完形品で，口径23cm，器高26.3cmを測る。口縁部は外反し，胴部中位に把手を有する。外面の把手の上位はヨコ方向ヘラケズリ，下位は格子状のタタキ目，内面はタテ方向ハケ目である。

今宿周辺採集遺物　　数字は実測図番号に一致する

今宿遺跡

今宿遺跡第１・３次発掘調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第389集

1994年（平成６年）３月31日　発行

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　㈱西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚８丁目2-15